

(ホームページ <http://www.lib-hiroshima-u.ac.jp>)

Vol.28 Mar. 2003

広島大学附属図書館 百周年記念号

広島大学附属図書館百周年にあたって

附属図書館長 宮澤啓輔

2002年、広島大学附属図書館は設置百周年を迎えました。当図書館は1902年(明治35年)8月に広島高等師範学校図書館として開設され、その後昭和4年には広島文理科大学設置により、広島文理科大学附属図書館と改称されました。第二次世界大戦では、蔵書の大半と建物を焼失しましたが、戦後、廃墟の中で残った蔵書の整理、閲覧が再開され、昭和24年には学制改革に伴い新生広島大学附属図書館となり、現在に至りました。このように設置以来、百年間、明治、大正、昭和、平成と、前身の時代から現在まで一貫して本学の教育・研究活動を支えて参りました。

この間、振り返ってみますと、設置当初から昭和35年まで広島市民の協力を得つつ広く一般市民にも開放され、市民の図書館として親しまれ、地域文化に貢献したこと、昭和20年には原子爆弾被災により、大きな損失を受けた中から復興されたことが思い起こされます。さらに大学の東広島統合移転とその発展とともに全学の協力のもとに図書館も整備され現在の形になりました。現在、中央図書館、東図書館、西図書館、医学分館、東千田分室の4館1分室体制で運営され、蔵書数は合計300数万冊、年間利用者は約100万人、年間貸出書籍数は27万冊を数えるにいたっております。

目次

- 巻頭 広島大学図書館百周年にあたって……………附属図書館長 宮澤啓輔… 1
- 図書館百周年記念式・講演会・展示会について……………土肥善嗣… 2
- 図書館百周年記念講演「これからの角筆研究 ―東アジアを視野に」……小林芳規… 5
- 海外研修出張報 ～大韓民国の大学図書館～……………川上 裕…23
- OCLC との ILL システム間リンクの運用開始について……………倉田英子…26
- 2001年度図書館統計……………27
- 2002年度図書館活動記録(2002年3月～2003年2月)……………28
- 付録 「広島大学図書館百年の歩み」「広島大学附属図書館の変遷」

また最近数年は電子化した情報社会、激増し多様化した情報に対応すべく、いつでもどこからでもアクセスでき、情報を提供できる電子図書館を構想し、貴重資料のデータベース化、電子ジャーナルと情報データベースの導入等その実現に努めてまいりました。このような発展・整備は歴代の学長、利用者である学生、教職員、地域の社会の皆様ならびに関係各位、図書館職員等、多くの方々が「図書館を愛し、利用し、その発展にご尽力くださった賜物」と深く感謝する次第であります。

このたび百周年記念事業として昨年11月20日に記念式典、名誉教授小林芳規先生による「角筆」に関する記念講演会を開催し、また1か月間「角筆関連の文献類」と「当図書館百年の歩みを示す写真」の展示会を開催し、関係各位のご列席を頂き、また多数の来場者を得ていづれも盛況の裡に終了いたしました。さらに記念事業の一環として現在、利用者のアンケート調査をもとに外部評価をすすめております。これは利用者のニーズを汲み上げ、また学外の専門家、

有識者の評価を頂き、図書館の今後の充実に資するためのものであります。

百周年を迎えた現在、大学図書館を取り巻く環境は大きく変化し、より高度な教育、研究に対するサービスの提供、社会に対する貢献、組織運営の変革を要請されております。このため図書館では日常のサービス向上はもとより、本学の学術情報サービス基盤の再構築の中核として、学内外の諸機関・組織と連携・協力して利用者の多様化したニーズに応えうる図書館に成長して行きたいと考えております。この改革の時にあたり、当図書館百年の跡を振り返り、その上に将来に向けて改めて本来の理念・目的(学術文化資産の収集、整理、提供、学術情報の提供、学習環境の提供)を再確認し、利用者である社会と大学構成員の要請に十分応え得るサービスを構築してゆくため、利用者の協力を得つつ、図書館職員は一丸となって努力する所存でございます。今後とも皆様のご支援ご協力をお願いする次第です。

広島大学図書館百周年記念式典 ・記念講演会・記念展示会の報告

広島大学附属図書館は、明治35年(1902年)8月の広島高等師範学校図書館の開設から、昭和4年(1929年)4月の広島文理科大学附属図書館を経て、昭和24年(1949年)5月に、新制国立大学の広島大学の附属図書館として創設され、昭和40年代の大学紛争、平成7年度の東広島地区への統合移転等を経たのち、この平成14年(2002年)8月でちょうど百周年を迎えることになりました。この間実に明治・大正・昭和・平成と四つの時代にまたがり、一貫して広島大学の教育・研究活動を支えてまいりました。

附属図書館は広島文理科大学附属図書館の建物と蔵書を引き継ぐ形で発足しましたが、この時広島文理科大学は昭和20年8月6日の原爆被災によって壊滅的な打撃を受けており、図書館の被害も甚大で、疎開中の図書9万冊を除いて約18万冊の蔵書は灰燼に帰し危機的な状況にありました。初代学長森戸辰男の奔走等もあり、

文部省から教育課程文庫の寄託、旧海軍兵学校等からの転用図書、広島県の協力等を得てようやく約25万3千冊での出発となりました。また広島大学は創設時、多くの包括校及び併合校を有していましたが、附属図書館も最大時9つの分館(全国最大)を持つという典型的な分散型の図書館でもありました。暫時部局の移転・統合・設置等が行われ図書館も変遷していきますが、平成7年の東広島市への統合移転完了時にようやく現在の中央・東・西の各図書館、医学分館、及び東千田分室の4館1分室体制として整備されました。平成14年3月末で蔵書数約304万冊、年間入館者数は100万人近く、年間貸出冊数約19万冊を数えるに至っています。実は昨秋の図書館開設百周年の資料作りの折りの調査で、昭和24年の発足時から延べ入館者数約2,300万人、延べ貸出冊数520万冊(いずれも推計)に達することを知りましたが、この54年間に実に多くの

学生や教官の方々が利用されているのだと、改めてその責務の重大さと期待の大きさを感じている次第です。広島大学は創設期から大学紛争を経て、現在第3の改革期にあるといわれています。国立大学法人化を目前にしたこの時期に、附属図書館が開設百周年を迎えましたことで、これまでの来し方をふり返り、あらためて現在をみつめるよすがといたく百周年の記念事業を企画いたしました。

【記念式展】

日時 平成14年11月20日(水) 14:00～14:20
場所 中央図書館ライブラリーホール

宮澤啓輔館長の抱負と決意を込めた式辞に続き、前川功一副学長（牟田泰三学長代理）から期待と激励の挨拶がありました。また筑波大学附属図書館長 山内芳文氏、広島工業大学附属図書館長 横瀬宏氏等からの祝電が披露されました。式典には本学教官・学生、部局長、事務

局幹部等学内関係者、東広島中央図書館長他の公共図書館関係者、近隣の大学図書館関係者、及び一般市民等約150名の出席を得て盛大に挙行されました。

【記念講演会】

日時 平成14年11月20日(水) 14:30～16:30
場所 中央図書館ライブラリーホール

また、記念講演会は、小林芳規氏（本学名誉教授・徳島文理大学教授）により「これからの角筆研究—東アジアを視野に一」と題して約2時間に亘って行われました。国語学のみでなく、近世史や近世教育史などの学際分野、さらには韓国、中国等の東アジアの言語文化研究にも新しい展開を予感させる内容の講演で、会場のライブラリーホールは開設以来という盛況で時間一杯まで研究者や学生の熱気に包まれていました。



【記念展示会】

日時 平成14年11月20日(水)
～平成14年12月20日(金)

場所 中央図書館玄関ロビー

●角筆文献・角筆スコープ等展示

「角筆の世界へ」と題して「角筆」の関係資料が一堂に集められ分かりやすく紹介する展示会が開催されました。まず角筆文献（角筆で文字や絵などを書き入れた古文獻）では本学が所蔵するものから「蘇悉地羯羅經」（院政初期）（12世紀写本）等12点、それに最近小林教授が韓国で発見された角筆文献のパネル写真5点のほか木製角筆（レプリカ）、さらにライトを燈して文字を読み取る角筆スコープ等が展示されました。角筆スコープには見学者が実際にライトで浮かび上がった文字に目を凝らしたりしていました。また講演後には小林教授がパネルの前で自ら解説される一幕もありました。さらに小林教授の著作から「角筆文献の国語学的研究」（恩賜賞・日本学士院賞）（昭和62年・汲古書院）等5点が展示されました。また展示コーナーの一角では韓国 KBS テレビ歴史スペシャル「千年前、この地にもうひとつの異なる文字があった」（2002.10.12放映）がビデオ放映されて、時折日本語の要約を手にする人もいました。この角筆展示については文学部角筆資料研究室及び位藤邦生研究室の方々から全面的なご協力をいただきました。

●広島大学図書館百年の歩み写真パネル展示

広島高等師範学校図書館の閲覧室風景、授業風景、建物風景等から始まって、明治・大正・昭和・平成に至る図書館及び広島大学や包括校の懐かしい写真100枚による百年の歩み展が同時に開催されました。過ぎ去った古き良き時代の写真の数々に多くの見学者が懐かしげに立ち止まっていました。なお写真展示に当たっては、資料の提供等広島大学五十年史編集室からご協力をいただきました。それに図書館百年の正に刻印ともいふべき蔵書印が当時のままに展示されました。広島高等師範学校等包括校時代の今なお鮮やかな朱肉の蔵書印が歴史を刻んでその歩みを我々に伝えてくれます。その他「百年の歩み 年表」「図書館の変遷」マップ等もパネル展示されてこの1世紀を概観できるものとなっていました。

この2つの展示会は12月20日(金)まで一般公開され延べ2千人の来場者がありました。

これらの模様については附属図書館ホームページにも掲載していますので合わせてご高覧ください。

<http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/100nen/framepagel.htm>

（情報管理課 土肥善嗣）



広島大学図書館百周年 記念講演会講演録

平成14年11月20日(水) 14:30～16:30

広島大学附属図書館ライブラリーホール

講師 小林芳規先生（徳島文理大学教授 広島大学名誉教授）
演題 「これからの角筆研究 ―東アジアを視野に―」

一. はじめに

ただ今ご紹介頂きました小林でございます。広島大学の図書館が100周年を迎え、その記念すべき会に私どもにこの発表の機会を賜りまして、本学の牟田学長先生のご高配のもと、本日は前川副学長先生のご臨席を賜り、宮澤図書館長先生をはじめ、附属図書館の関係各位、並びに文学部関係各位に御礼を申し上げます。

私の本日の話は、お手元に用意しました6枚のプリントの1枚目の始めに、要旨として記したようでありまして、前半が朝鮮半島との関係についてであり、後半が日本国内の問題であります。そのあいだにCD-ROMとスライドの映写を挟み、ご覧頂きたいと存じます。しばらくご辛抱をお願い申し上げます。

要旨は1、2、3にまとめたようであります。第1は、角筆文献が、朝鮮半島でも7世紀から19世紀にわたって使われたことが、2000年7月以来の5回にわたる訪韓調査で分かってまいりました。今も発掘が次々と続いております。これによりまして、中国大陆と日本列島とを併せまして、東アジアの漢字文化圏で角筆が使われたということが分かってまいりました。

第2は、ハングル、韓国の文字でありますハングルが1446年、15世紀の半ばに公布されるようになりますが、朝鮮半島の角筆文献は、それより前から朝鮮語を記してありまして、新羅時代、高麗時代の言語文化研究の新しい資料が発見されたことであります。今韓国では重要視され、急速に研究が盛んになってきております。日本の古代文化と朝鮮半島の言語文化の交流を考察する上でも、今まで具体的資料に恵まれなかった8世紀から12世紀にかけての新しい資料

が得られることになったのであります。

本日の発表は、この点について特に8世紀、日本では奈良時代であります、ここを中心に述べることを第1の目的といたします。その中で、中国大陆の敦煌文献の中から見つかりました敦煌の角筆文献にも言及することにいたします。

第3は次のようです。中国大陆を源とし、朝鮮半島を経て、日本に伝わってまいりました、この角筆で文字を記すという方式は、日本では独自に展開をいたしました。そしてその書き残された資料は、今日までに日本全国、北海道から沖縄の石垣島まで調査いたしました結果、日本全国各地から3,200点余りが発掘されております。紙を凹ませて文字を書くという特異な方法、表記法の結果としまして、角筆文献には昔の話し言葉や方言が現れてまいります。

本日の発表では、方言の歴史、方言史という新しい研究分野が開拓されるであろうという見通しの1つの試みを述べさせていただきます。併せてこの角筆文献が近世史、特に近世教育史の新しい資料になることにも言及したいと存じます。以上が本日の発表の要旨であります。

二. 角筆と角筆文献について

本題に入る前置きといたしまして、まず標題に掲げました「角筆研究」の、角筆についての説明を簡単にさせて頂き、そしてそれで書かれた古文献であります角筆文献の発掘の現況について、触れさせて頂きたいと存じます。

角筆は、昔の筆記具でありまして、象牙や木や竹の一端を筆先の形に削り、その先端を紙の面に押し当てて凹みを付けて、文字や絵などを

書いたものであります。毛筆で書くのと異なりまして、墨の黒い色とか赤などの色が着かないのであります。角筆で文字や絵などを書いた古い文献を、角筆文献と言います。その一端は、展示パネルなどでご覧頂けたかと思えます。

この角筆文献は、40年前に第1号が日本で発見されました。それ以来、日本全国から発掘されるようになりました。中国大陸でも漢代、1世紀に当る2000年前の木簡に、板面を凹ませて書き入れてあることが分かり、更に中国大陸の西北方にあります敦煌の洞窟から出てまいりました敦煌文献からも発見されまして、東アジアにおける角筆の源が中国大陸にあることが分かってまいりました。このたび朝鮮半島からも見つかりまして、今申しましたように、次々と発見が続いているわけであります。

その角筆文献の最も古いものを、紙に書いた本という点で見ますと、日本では8世紀、奈良時代の正倉院文書に書き込まれたものが、ただ今発見されているところでは1番古いものであります。それが日本では大正時代まで各時代にわたって使われて、その文献が残っています。

朝鮮半島では、1番古いのは7世紀末に書写されました『金剛般若波羅蜜經』であります。それ以来ずっと使われたようでありまして、19世紀の文献にも、角筆の書き入れが韓国で行われて、それが残っているのです。

敦煌文献では建初2年(406年)、5世紀の始めに敦煌の人である比丘徳祐が書写した『十誦比丘波羅提木叉戒本』に、角筆の書き入れが見つかりました。この敦煌文献は、敦煌の第17窟に10世紀の終わりに埋め込まれましたが、それまでの各世紀にわたって角筆の書き入れが行われたと見られ、それぞれの世紀の敦煌文献から見つかっているのです。

その角筆文献の、今日までに見つかりました点数を申しますと、日本列島では、先ほど申しましたように、北海道から石垣島まで調査しました結果、47都道府県、全県下から発見されました。現在のところ、3,265点を数えています。

朝鮮半島では2年前から調査を進めまして、各博物館や各大学の中央図書館、あるいは資

料室などを調査いたしまして、ただ今のところ、60点ほどが見つかりました。まだ次々と発見が続いています。

中国大陸では、先ほど申しましたように、1世紀、2000年前の木簡にも書き入れが見つかりました。居延漢簡、これは昭和の始めに居延という内蒙古の砂漠地帯から発見された約1万点の木簡を言いますが、その中に、その時に書き込んだ角筆の文字が見つかりました。現在これは台湾の中央研究院にありまして、一昨年原本を調査させて頂きました。更にシルクロードの方の武威という所のお墓から出土しました漢の時代の木簡にも、書き入れが見つかりました。私が調査したのはこの2点だけですが、居延漢簡はその後2万点とも3万点ともいう数が発掘されていますから、それらを調査しますとずっと増える可能性があります。

三. 八世紀(奈良時代)の日本に及ぼした新羅の言語文化

敦煌文献につきましては、広島大学を定年後3年ほど経って、大英図書館に調査に行きまして、そこで発見いたしました。更にフランスの国立図書館、そして一昨年の台湾の国家図書館の調査によって、それぞれからただ今のところ44点ほど見つけてあります。調査したのはわずかに70点ほどであります。その中の約7割近くから、角筆の書き入れが見つかりました。のちほど申しますが、敦煌文献は世界中に5万点ほど、今あるそうであります。

また中国大陸では、明や清時代の写本や板本からも見つかりました。これは北京大学の図書館で調査したものでありますが、そのほか重慶市の西南師範大学図書館、これは楽竹民広島市立大学教授がここを訪れて、見つけて報告して下さいましたものであります。同氏は私どもと一緒に広島大学で勉強した方です。これらを併せて、明、清代の角筆文献が、ただ今のところ20点見つかりました。中国大陸にはこの時代の膨大なる写本、板本がありますから、調査を進めればもっと見つかる可能性があると思

さて、これから本題に入らせて頂きたいと思

います。私の本日の話の前半分は、8世紀、奈良時代の日本に、朝鮮半島の新羅の言語文化がどのような影響を与えたのかということ、最近発見されました角筆文献で、具体的に見てみようとするものであります。日本のカタカナの起源の問題にも触れることになります。

7世紀以前において、朝鮮半島の文化が日本に大きく影響したことは、すでに考古資料や金石文、あるいは『古事記』や『日本書紀』の記事などで知られていますが、8世紀の奈良時代については、具体的な資料に恵まれないこともあって、必ずしも明らかではなかったようであります。

今年の秋の正倉院展には、新羅の文物が展示されました。有名な新羅の『新羅楊家上墨』という文字が入った墨とか、『華嚴経論』というお経の巻物を包んだ紙の帙とか（その内貼の紙には新羅の古文書が反故として使われています）、あるいは新羅の鉄、銅合金の入れ子式の重ね鉢、あるいは匙、また毛氈などが展示されていました。これらは奈良時代以来正倉院に伝わったものであります。奈良の大仏が開眼されました天平勝宝4年（752年）には新羅から700人の使者が来たということも知られています。

これらの文物や使者のことは、わずかな資料であります、これから推定しますと、当時の日本が新羅との交流、交易に広がりを持っていたことを推測させるものであります。そういう中で、新羅の言語文化の影響を見ることのできる経典が、角筆文献という形で発見されたわけでありす。その1つが大谷大学図書館に蔵せられます『判比量論』という経典であります。しばらくこの『判比量論』について説明をさせて頂きたいと思ひます。

I. 大谷大学蔵『判比量論』（新羅の角筆の文字と符号の書き入れ）

1. 判比量論について

『判比量論』は、新羅の有名な僧の元曉が咸亨2年（671年）、55歳の時に撰述した論書であります。このことは、大谷大学に所蔵される経巻の奥書から分かります。のちほどCD-ROM

でご覧頂きたいと思ひます。元曉（617-686）は日本の弘法大師のような尊敬を朝鮮半島の方々から受けています。

因明という古代インドの論理学の形式を借りて、唯識という経典の教説を論じた、大変難しい内容の経典であります。大谷大学蔵本は巻物でありますけれども、本文の首尾が無くなっていまして、本文は105行ほどが残っているものであります。それと巻末にあります廻向偈という、偈文の2行と、奥書の3行、併せて5行だけが今残っております。全体の8分の1ほどと推定されています。

その奥書や紙背に「内家私印」という朱印が押されています。これもCD-ROMでご覧頂きますが、この朱印は光明皇后（701-760）の蔵書印でありますから、この光明皇后がこの経巻を持っていたということが、これで分かります。この経巻は昭和63年に国の重要文化財に指定されました。

指定の時には、これは日本で奈良時代に日本人が書いた、奈良写経であるとされています。ところがこれから述べますように、角筆の書き入れが発見されたことによりまして、実はこの経巻は新羅で書かれ、それに新羅で角筆が書き入れられたことが分かってまいりました。

その角筆は、経典の漢文の本文を読むために漢字に仮名や、あるいはその発音を表す同じような音の漢字を当てたり、種々の符号を書き入れしたりするのに用いています。

およそ現代の日本では、漢文を読むということは、一般の人にとっては、せいぜい高等学校の国語の中の1教材として学習するに過ぎませんが、江戸時代以前においては、漢文を読み解くということが学問の重要な、ほとんど大部分を占める内容でありました。特に僧にとっては、経典を通してその言語を理解し、更にその思想を摂取しましたから、漢文を読むことは重要な作業であったわけでありす。

新羅でも恐らく同様であったということが、この角筆の書き入れで知られるわけでありす。従いまして『判比量論』の角筆の文字や符号を解読することは、これが新羅の当時の実物であ

り、現在知られている唯一の現存資料であるだけに、極めて重要であります。

今年1月から10月まで、5回ほど京都の大谷大学に通いまして、解読を続けていますが、1300年ほど前の凹みでありますから、凹みが薄れて、極めて読み解くのが困難であります。それでも何とか少しずつ読み解けてきているところでありまして、ここでは今までに私が見ることが出来たものについて、取り上げることにいたしますが、今後の検討を要するものがあることを、予めお断りさせて頂きたく存じます。

2. 角筆の文字

先ず角筆で書き入れた文字には、プリントの1の(1) (稿末資料I参照)のような例があります。経本文の漢字の音を、似た漢字の音で、角筆で書き入れたものであります。経本文の「仏弟子に對ひて不共不定」の不共という「共」字の音を表すのに、これと似た音を持つ「宮」字を角筆で書き入れています。この不共という仏教語を音で読むということを示していると考えられます。

現代なら音声記号で書き入れたり、あるいは日本人ならカタカナで書き入れるところですが、そういう方法の無かった時代には、類似の音で、自分の知っている漢字を使って示したわけであります。私どもの術語では類音字と呼んでいます。

厳密には、本文の漢字と類音字との発音が、完全に一致しない場合があります。この例も、厳密には一致しません。この漢字の音は、初声の子音と、中の母音と終声の **ng** とから成っています。初声と終声とは一致しますが、中の母音に少異があります。しかし本文の「共」に「宮」という類音字を施した人の意識では、同じ音であったと思われます。われわれは漢音では「キョウ」と「キュウ」と違った音と理解しますが、この書き入れをした人は同じ音だとして書き入れたと考えられます。

これは何を意味するのでしょうか。最近、朝鮮半島の古代漢字音について、その基層となった中国音系に敦煌地方で行われていた唐五代の

西北方言の音があって、それが北の方から新羅に入って新羅の漢字音に影響したという説を、権仁瀚教授が、ソウル大学の雑誌で発表しました。これは新羅という国名の表記に当てた異表記の漢字を分析して、推定したものであります。

確かにこれを調べてみますと、参考1に挙げましたように(稿末参照)、敦煌文献の中に『開蒙要訓』という、漢字の音を類音の漢字で記した辞書があり、その中に「共」と「宮」との関係と同じ例が出てきます。一例として「蜂」の音を「風」という字で表している例を挙げておきました。「共」と「宮」と同様に、鍾韻字に対しても東韻字で注音をしています。

これによりますと、『判比量論』の角筆の「宮」という音注は、権教授の推定されたところを裏づける例となりまして、新羅の漢字音が中国の西北方言の影響を受けたことが推定される証拠の1つとなるかと思えます。『判比量論』の角筆の音注には同様な例が他にもあります。

朝鮮の漢字音は、日本のわれわれが使っています音の中の呉音と密接な関係があるようですが、具体的なことがまだ分かっていません。それを考察する上に、重要な例になるかと考えられるものであります。

『開蒙要訓』というのは、これは墨で書いてある本であります。初学者のために作ったものでありまして、字数そのものも非常に少ないのであります。漢字の全部は収録していません。従いまして、漢字の全体について、その音の関係がどうであったかということはこの資料だけでは分からないのでありますが、それを補うような資料が敦煌文献の中に、角筆で書き入れた例が見つかりました。それが参考2に挙げたものであります(稿末参照)。

これは『観音経』という敦煌文献のS.5556番のものであります。スタインが集めて大英図書館にありますものです。この経本文の羅刹鬼の「刹」という字の横に、角筆で、非常に薄いのですが「切」字が付けてあります。羅刹の「刹」の発音を、易しい「切」で表した、いわゆる類音字であります。しかしこれも母音が厳密には違うのでありますが(稿末参照)、これを付け

た人は同じ音だとして付けたと考えられます。こういう例は、敦煌文献を丹念に探していきますといろいろ見つかるのでありまして、更に調査が必要になるわけであります。

次に『判比量論』には、経本文の漢字の訓を角筆の文字で表したと見られるものがあります。プリントの1の(2)の例であります(稿末資料I参照)。これは「法處所攝は根に待せざるがゆゑに」と読まれます。その「根」という字の右傍らに、角筆で「ㄹ」に見える仮名が施されています。これも後ほどCD-ROMでご覧頂く予定であります。

「根」というのは六根清浄の目とか耳とか鼻などの、6つの認識器官を示す「根」であります。植物の根が成長、発展させる能力を持っています、幹や枝を生ずるというのに喩えられるところであります。角筆のこの「ㄹ」と見える字は「根」の漢字の発音「근」を表したとは考えられません。またテニヲハのようなものでもありませんので、恐らく「根」の、当時の新羅の訓を表したものと見られます。その「ㄹ」に見える字は漢字を辿ってみますと、「部」という漢字の偏を省きまして、旁の邑(おおぞと)を草書体にした形に見えるのであります。日本では古く「へ」という仮名に、この字形を使っています。

その下にカタカナの「リ」に見える字があります。これは角筆の凹みが非常に薄くて、第2画の縦線がやや長く書かれているのが漸く見えました。後ほどCD-ROMでご覧頂きます。第1画の方の短い線は極めて薄くて、辛うじて見える程度で、まだ若干疑問が残るところであります。しかしこの形だといえますと、「利」の字の禾偏を省いた、旁の「リ」に似たものとなります。韓国の現代語では、この「根」を「뿌리」と発音していますが、ハングルが制定されて間もなく出版された、1447年の『龍飛御天歌』という文献では、この音が「ᄃᆞᆫ」という音で表記されていますし、また済州島のような方言でも「ᄃᆞᆫ」というふうに通音されているそうです。

しかし、遡った古代には「ᄃᆞᆫ」であったと南

豊鉉教授は推定されています。韓国の古文献で、13世紀に書かれた三国時代の事蹟を記した『三国遺事』の中に、新羅の歌謡といわれる歌14首が載っています。全部漢字で書かれていますが、中に万葉仮名の音仮名のような文字遣いもあります。これを解説された小倉進平博士は、『郷歌及び吏読の研究』において、「星利」を「별을」と読み、「利」は、ㄷを表すのに用いられたと説かれています。「リ」が「利」の旁とすれば、「ᄃᆞᆫ」の「ㄷ」を表したことも考えられそうですが、この「ㄷ」には尚検討の余地があります。

「リ」がこのように見られるならば、漢字の画を省いた字形を、いわば片仮名のように使って、経本文の漢字の訓を表したことになります。

日本では經典の漢文に毛筆で仮名などを書き入れて訓点を施すことは、平安時代の初頭800年頃から始まりますが、『判比量論』に書き入れられた角筆の文字は、それよりも少なくとも60年以上早く、新羅で同じ方法が既に行われていたことを語っています。

『判比量論』からは、その後の調査で、このような角筆の文字の書き入れが20箇所以上にあることが分かりました。その解説中ではありますが、新羅で漢文を訓読した実態の一面が分かりつつあり、日本で毛筆による訓点の書き入れが始まった頃の状況に良く似ていて、この方法が新羅から影響された可能性が大きいと考えられます。

3. 角筆の符号

『判比量論』には、角筆の文字の他に、角筆で色々な符号も書き入れられています。プリント2の角筆の節博士(B型—行間に書き入れた譜)、3の角筆の声調符、4の角筆の合符、5の角筆の節博士(A型—横長の波線)です。(稿末資料I参照)

その一々について詳しく説明することは、別に説いたことがあり、今日は時間の都合で出来ませんが、これらの符号は、日本では全く用いられたことが無いもの(合符、節博士A型)や、使われたとしても、時代が降って平安時代の10

世紀以降に、朝鮮半島の影響で使い出されたと見られるもの（節博士 B 型、声調符）ばかりです。

これらの符号は、朝鮮半島では、10世紀・11世紀刊の經典に角筆で書き入れられて用いられていることが、二年前（2000年）の夏以来の訪韓調査で発見した角筆文献によって判明しました。『判比量論』に角筆で同じ符号が施されていることは、八世紀に遡っても朝鮮半島で行われたことを考えさせます。

これらの符号の中で、角筆を書き入れた時期を考える上で手掛かりとなるものが二つあります。その一つは、角筆の節博士です。節博士は声明の旋律を表した譜で、歌詞の漢字の傍らに長短等の線で示します。この凹みの線が、光明皇后の「内家私印」の朱印と重なった所があります。そこでは角筆の凹みのために、朱印の一部が切れています。これは角筆の凹みが先に書き入れられてあり、その上に後から朱印が押されたことを語っています。従って、角筆の書き入れは光明皇后の亡くなる760年以前であったことを示しています。

その二つ目は、角筆の合符です。合符とは、漢字二字が一単語又は一つ概念を表すことを示すために、漢字の字面に縦線等を施すものです。プリント4の合符のうち、αに掲げた例をみると（稿末資料I参照）、「聖教」には、合符として角筆の「>」が施されていますが、「聖」の最終画の墨が角筆で削られ、その剥げた墨が角筆の合符の凹みに着いて嵌まっています。これは、墨の本文の漢字が書かれて間もなく、墨が乾き切る前に、角筆が書き入れられたことを示しています。

以上のような、朝鮮半島で用いた角筆の符号が『判比量論』に使われていることや、その角筆の凹みの状況から見て、本文は朝鮮半島の新羅で書かれ、間もなく角筆が書き入れられて、その経巻が、そのまま日本に齎されたと考えられます。

4. 大谷大学蔵『判比量論』の書写と伝来

『判比量論』の書名が文献の上に初めて現れ

るのは、天平12年（740）で、正倉院文書に出ています。プリント6の①に掲げたようでありまして（稿末資料I参照）、天平12年7月8日の写経所啓に、「判比量論一卷」を「大官寺本」で書写したとあります。「大官寺」は大安寺です。従って、これ以前に朝鮮半島から日本に伝わって来ていたことが分かります。それを伝えたのは、大安寺の僧で、新羅に留学して華嚴經を修めた審祥であると説かれています。審祥は、帰朝後の天平12年（740）に東大寺において日本で初めて華嚴經の講説をしています。これは凝然の『三国弘法伝通縁起』巻中の「華嚴宗」に記されています。プリント6の②の（1）に掲げたようでありまして（稿末資料I参照）、「旧訳六十華嚴」を「新羅学生大安寺審祥大和尚」が講じたとあります。それ以後、華嚴經の講説は平安初期まで五十年間続いたとされています。審祥の華嚴經の初講説の後、東大寺の大仏が造営されています。審祥は帰朝に際して多くの経巻を持ち帰って来ています。それらの経巻の名前は正倉院文書に載っていきまして、堀池春峰氏が一覧していらっしゃいます。『判比量論』もプリント6の②（3）のように（稿末資料I参照）、審祥の蔵書の中に載っています。また元暁が書いた本で草書体の本もプリント6の②（2）のように、やはり持ってきているのであります。その本は光明皇后の令旨で、光明皇后に貸したという記録もあります。その中には光明皇后が、召し上げてしまったという本も、記録に出てまいります。恐らく『判比量論』はそういうものの1つであったろうと考えられます。大谷大学の宮崎健司氏は5年前の論文で、この正倉院文書の記録から、大谷大学蔵本は審祥が新羅から持ち帰った経巻であろうと推定されていましたが、このたびの角筆の文字と符号の発見により、それが裏づけられることになったと思うのであります。

Ⅱ. 佐藤達次郎氏旧蔵『華嚴文義要決』（新羅のヲコト点等の書き入れ）

1. 華嚴文義要決について

8世紀の奈良時代に、新羅の經典の訓点の影

響を受けたと見られるもう1つに、佐藤達次郎氏旧蔵の『華嚴文義要決』という經典があります。これは戦争中、東京の空襲の時に原本が焼けてしまいましたけれども、その焼ける前に、原本そっくりの複製本を作っていましたので、それで今その姿を見ることができます。それには、訓点として仮名と共に極めて重要な役割を果たしたヲコト点という符号が書き込んであります。これがやはり新羅から学んだと考えられるものであります。そのことを、以下簡単にご説明させて頂きたいと思います。

『判比量論』という經典は新羅で書写され、これに新羅で角筆が書き入れられ、その現物がそのまま日本に持ち込まれ伝わったものでありますが、この佐藤本の『華嚴文義要決』は、新羅の經典を親本として、日本の僧が日本でそれを書き写したものであります。

『華嚴文義要決』は作者が新羅の皇龍寺という華嚴宗の大寺の表員という僧です。別名『華嚴要義問答』とも呼ばれています。正倉院の天平勝宝3年(751年)の文書の中に『華嚴文義要決一卷表員師集』と出ていますから、この時までには日本にもたらされていたことが知られます。

平安時代の初めに、その本文を日本の僧が写した本が2種、現在残っています。1つは延暦18年(799年)に、日本の行福という僧が写した本でありまして、現在、比叡山の延暦寺が持っています、今国宝に指定されています。もう1つがこの佐藤達次郎氏旧蔵本(以下「佐藤本」と呼びます)であります。筆跡や紙の質などから考えて、延暦寺蔵本と同じころ、800年ころに書写したものと、焼ける前の判定でそう見られています。

2. 佐藤本『華嚴文義要決』のヲコト点(日本におけるヲコト点使用の始まり)

佐藤本には黄褐色による訓点が施されています。ヲコト点という符号をはじめ、返り点の符号、あるいは合符などがあります。このうちヲコト点は、日本のヲコト点では最も古く、その使い始めのころの初期の姿を示しています。極めて素朴なものであります。また日本ではその

形式のヲコト点が全く見られない、特異な形式のものであります。

ヲコト点と言いますのは、漢文を訓読するのに、漢字の字面上に点「・」や線「\」や鉤「フ」などの印を書き加えて、その形と位置とによって、一定の読み方を示した符号です。佐藤本のヲコト点を帰納して、漢字を四角に見立てて、それにヲコト点とその読み方を示したのがプリントの資料Ⅱの1の上の所にやや大きめの四角を書いた図(稿末参照)であります。点が6個、左下から「テ」「ヲ」「ト」「ニ」「ノ」「ハ」とあり、そして斜めの線「ナリ」というのが1個あります。こういう素朴なものであります。これらは漢字の字辺の上に、直接点を着けたり線を引いたりしています。これが日本の初期のヲコト点を付ける位置であります。

その実際に用いられた例の2例を下に書いておきました(稿末参照)。先ず最初の例は「或いは神と天と」という並列の語句の「神」という字の左肩に点「・」を付けています。これが上の表に示しました「ト」という読みを表しています。それを平仮名で私が「と」という読みを示したわけであります。「天」という字の左肩の点「・」も同様に「ト」と読んでいます。共に並列の「と」を表しています。

その次の「中に於いて六品の四巻は」という「六品の」の「品」という字の右肩から少し下がった箇所に「ノ」を表すヲコト点が付いています。上の帰納図にその位置を示しました。「四巻は」の「は」はその下で、「ノ」より下がった、真ん中あたりのところにあり「ハ」と読みます。このようにして帰納したのが、上の図であります。

このヲコト点図は、先ほど言いましたように、日本では全く見る事が出来ません。日本では7,000点くらいヲコト点資料がありますが、こういう形式のものは全くありません。ところが韓国で発見されました10世紀、11世紀刊の華嚴經に角筆で施されたヲコト点を帰納してみますと、これは韓国語で読んでいるわけでありまして、その読み方が極めてよく合うわけであります。

プリントの資料Ⅱの2に、ソウル市の誠庵古

書博物館に蔵せられます華嚴經に角筆で施したヲコト点の「・」（星点）の図を掲げました（稿末資料Ⅱ参照）。横線の上の方が、10世紀刊の華嚴經であります。下が11世紀刊の華嚴經であります。その読み方を調べますと、左下が韓国語で「ㅁ」[myə]という音を表して、日本語に当てると「テ」になります。その左上が「ㄹ」[r]でありまして、それが日本語では「ヲ」に当たります。

こういう風に、日本語に当てて比べてみると、佐藤本のヲコト点によく合ってくるのであります。「ナリ」というのが韓国では点「・」であります。佐藤本は線「丨」になっているのは、恐らく「ナ」「リ」という2つの音節であるために線で表したかと考えられます。

なお厳密に言いますと「ニ」と「ハ」の点は韓国では漢字の真中につけていますが、日本の初期のヲコト点は真中を使いませんので、これを移動させて、漢字の辺上に移して、日本式に変えたと思います。このような少異もありますが、基本的には韓国のヲコト点に合い、その影響で、日本のヲコト点が始まったということを考えさせる資料であると思います。

佐藤本のヲコト点は、このように韓国のものを基にして写したと思いますが、韓国では恐らく角筆で付けていただろうと思います。それを佐藤本は黄褐色に変えて写しておいたために、800年ころに韓国でもヲコト点が使われたということが考えられるようになったわけであります。

今まで日本の学会では、ヲコト点は日本独自であって、しかも平安初期の東大寺や興福寺がある奈良の僧が考え出したものであると説かれて、ヲコト点は日本固有のものであるという説が、定説になっていました。ところが朝鮮半島から角筆でヲコト点を用いられていたことが発見されまして、この日本固有説は覆されることになってしまいました。

それだけではなく、日本のヲコト点は朝鮮半島の新羅の華嚴宗で考え出され、使われていた方式を取り入れて使い出し、そしてその後日本で独自の発達を遂げたというふうには、見直す必要が生じてきたわけであります。ヲコト点研究

は、今まで日本国内だけで行われて、国際的視野を欠いていたようであります。日本の訓点研究も、東アジアの中で相対化して行われる必要が起こってきているわけであります。

3. 佐藤本『華嚴文義要決』の返読符と合符

佐藤本の『華嚴文義要決』には、返読符や合符も用いられています。プリント資料Ⅱの3（稿末参照）に示したようでありまして、これらの符号は日本の訓点では他には全く用いられたことがないものでありまして、これも朝鮮半島の10世紀刊、11世紀刊の角筆の加点資料には多く用いられている、朝鮮半島特有の符号であると見られるものであります。

四. CD-ROM とスライドの映写と説明

ここで前半を終わらせて頂きまして、CD-ROM とスライドをご覧頂きたいと思います。それではどうぞよろしくお願い致します。

1. CD-ROM（大谷大学蔵判比量論）

始めにCD-ROM をご覧頂きます。大谷大学蔵の『判比量論』であります。ではお願いします。

- ① この朱印が光明皇后の蔵書印でありまして「内」という字と「家」という字があり「内家」、これが「私」で、その下が「印」であります。「内家私印」という光明皇后の蔵書印であります。これが押してありますので、光明皇后の蔵書であったということが分かるわけであります。
- ② これは大谷大学にあります、鎌倉時代から江戸時代にかけての角筆を書き入れた文献でありまして、このたびのお話には関係ありません。
- ③ これが『判比量論』の巻末の部分の5行であります。初めの2行が廻向偈です。その行頭に「内家私印」の朱印が押してありますし、他にも3顆、押してあります。

後の3行が奥書でありまして、3行目に『判比量論一卷』とあります。その下に「釈元曉述」とありまして、この元曉がこの本

を書いたということが、この奥書で分かります。「咸亨二年歲辛未に在る七月十六日」と記され、この時に書いたとありまして、撰述した年が分かります。

これは元暁の自筆ではありませんで、その奥書を新羅で誰かが写したものであります。普通自筆でありますと、奥書は本文の筆跡と少し勢いが違いまして、気楽に書くものです。又、こんなに行を詰めて書くこともありません、これはもとの奥書を写したのですが、新羅で写したものと考えられます。

- ④ これは先ほど申しました、「共」という字の発音をこの角筆の「宮」という字で表しています。この凹みでは分かりにくいので、ここに色でなぞったものを別に出してみました。これを注音した人は、先ほど言いました敦煌の中国の西北方言を語っていた人が、同じ「キュウ」の音だと思ってつけたと同じ音を用いる環境にあったと考えられる例であります。
- ⑤ これが先ほど申しました仮名かと考えられるものでありまして、ここにそれを「部」という字の邑（おおぎと）を草書体にした字形があります。それを色でなぞったのがこれであります。この下の「リ」が非常に見にくくて、何日もこれを眺めていて、漸くこの長い方の縦線が見えてきたのです。そして更にこのところの短い線も見えてきました。これは漢字の一部を省いた字体のように見えるものであります。
- ⑥ これは先ほどの奥書の前の廻向偈の部分拡大したものです。節博士という声明譜が角筆で入っています。この箇所から始まりまして、リズムをつけてこういうふうの下向きに下がって行くリズム感で読んだと思われれます。その角筆の譜と「内家私印」の朱印が重なった箇所で、朱が切れてしまっている所が、見えます。これによって光明皇后の所蔵となり朱印が押される前に、角筆が書き入れられたということが分かるのであります。

⑦ これもその廻向偈に角筆で書き入れた声明の譜です。その後の調査で、それぞれの字に着いていることが分かりました。

⑧ これも同様であります。本文のこの辺のところにも、声明の譜、節博士が角筆で付けられています。

⑨ これは漢字の声調（アクセント）を示す符号です。漢字の四隅に圈点を付けることによって、その中国語の第一声、第二声、第三声というアクセントを示すわけであります。現在の韓国語にはこの漢字のアクセントはありませんけれども、この新羅時代には中国語と同じように、中国語の影響を受けて、まだアクセントを保っていたかと思います。その符号を、角筆の凹みで大きい丸を、二筆で書いています。この線に引っかけた一部切れています。これは「離」という字でありまして、切韻系韻書で平声というアクセントであります。

後世は漢字の左下に丸を付けて、平声を示しますが、古くは右上が平声で、右下が上声、左下が去声、左上が入声であったことを示しています。これは今まで中国の記録にはあったけれども、実例が見つからなかったものです。ここにその例を見ることができたことになります。

⑩ これは合符という、漢字2字が1つの概念を表すことを示す符号であります。これも非常に見にくいのですが、よく見ていくと、このところに角筆で縦線が入っています。この合符という、漢字の字面に縦線を引く符号は日本では全く使ったことがありません。漢字にこう長く引くのは、角筆だからこれができたわけであります。この合符はその後、10世紀、11世紀の、韓国の角筆の資料にはよく使われています。この合符1つ見ただけでも、これは日本の角筆の書き入れではなく、新羅のものであるということが分かります。

⑪ これは「当に知る」の「知る」という字に角筆で施された節博士です。ところが注意して見ますと、この節博士はここからず

っと長く、右に何行にもわたって施されています。こういう長いリズムで読んだようです。そして不思議にこの長い符号というのは、句が終わったその終わりの字に付いています。

最初はこれは皴かと思ったのですが、韓国ではこの資料がたくさん出てきています。韓国の現代の声明のことを研究している法顕教授にこれを見て頂きまして、実演して頂きましたら、旋律が復元できまして、節博士と言いますか、声明の譜であることが分かりました。

この長い声明の譜は、角筆であるからこそ使用できたのでありまして、毛筆で黒く書いたら、經典の文字を汚して見えにくくしてしまいます。日本ではこのタイプのものは全く見られません。韓国独自のものがあります。以上が大谷大学の『判比量論』のCD-ROMであります。

2. スライド（佐藤本華嚴文義要決・朝鮮半島の11世紀の角筆とヲコト点）

それでは今度はスライドの方をご覧頂きたいと思います。スライドは、先ほど申しましたヲコト点の影響を受けたという、佐藤本の『華嚴文義要決』を最初にご覧頂きます。そのあと、2年前から韓国で発見されました角筆の書き入れの仮名やヲコト点をご覧頂こうと思います。ではお願いいたします。

- ① これは、佐藤本の巻頭部分であります。これは複製本で、原本は東京大空襲の時に焼けてしまいました。その前に作られた複製本でありまして、ここに『華嚴文義要決』という題が書いてあります。巻頭の部分です。訓点が黄褐色で施されています。
- ② これは、合符です。この「思惟行」という所に長い縦線が施されています。日本では見られない、韓国独自の合符が使われています。
- ③ 韓国独自の返読符もあります。ここに長い返読符が用いられています。ここから上に戻る事を示しています。こういう符号は、

日本では全く見ることはできません。それに対して韓国の10世紀刊、11世紀刊の角筆の資料では、こういうものをたくさん見ることができますので、韓国特有の符号だと思えます。従って佐藤本のこの黄褐色の符号は、韓国の角筆の符号を、恐らく色に変えて、日本風に黄褐色で、符号はそのままその通りに書き写したものと推定しているのであります。

- ④ 次は、ヲコト点の例であります。ここに「色」という字があります。「色」の左肩に黄褐色で「・」点が打ってあります。「色と」という並列の「と」を表します。「真実と」も、並列の「と」であります。ちょっと長めですが「と」であります。こういうヲコト点が日本では見られず、韓国に見られるヲコト点に合うということでもあります。
- ⑤ これは句切りの符号です。横線を長く書き入れています。これも日本の訓点では使えません。韓国独自の符号です。次に、ここからは、韓国で2年前に角筆のヲコト点や仮名の書き入れを発見いたしましたものです。11世紀、今から1000年前に韓国で印刷された高麗版です。
- ⑥ この初雕高麗版は、元が朝鮮半島に侵寇した時にほとんど焼かれてしまって、残っていないと言われていたのですが、近年仏像の胎内から発見されたものです。誠庵古書博物館長で書誌学者である趙炳舜館長さんが、90巻それを買って取りお持ちになっていた、その1巻が『瑜伽師地論』という経巻でありまして、11世紀の初めころに印刷されたものであります。それにこういう角筆の書き入れがあることが分かったのであります。
- ⑦ これは合符でありまして、先ほど佐藤本で見たり、あるいは大谷大学の『判比量論』でも見られたりしましたものです。この長い、字にかけた縦線であります。この3字が1つの概念であるということを示す符号でありまして、たびたび申しませんが、日本

ではこの符号は全く使っていません。字面上にこういうふうに長い縦線を書くことは、角筆だからできるのでありまして、もし毛筆の墨で黒く書いたら、この字が見えなくなりますから、このような符号は使わないわけであります。

- ⑧ これはその『瑜伽師地論』という経巻の巻頭の部分です。巻物の開いたところを普通に撮ったものです。ここの最初の行からずっと、今見たような符号が角筆で入っているのです。しかし、このような写真の撮り方では、その凹みは全く見えません。現にその趙館長先生も、私どもが発見する前までは、角筆の書き入れのあることは御存知なく、漢文の經典の初雕高麗版として大事に保管されていたわけであります。これを拝見しまして、角筆スコープという機械を持って行って、左上の方向から光を当てましたら、凹みをはっきり浮かび上がって来ました。角筆のヲコト点や仮名が書き込んであるということが分かったのであります。

趙館長先生はこの初雕高麗版を90巻ほどお持ちでありまして、私はまだその全部を拝見していません。調査に行っては少しずつ拝見しているのですが、2年前に初めて拝見に上がったときには、白い風呂敷包みに包んだ10巻だけを出して下さった。「これが初雕高麗版です」と言われた時に、私は非常に感激しました。それは初雕高麗版というのは元が焼いてしまっていて残っていないだろう、日本でも南禅寺に若干あるだけだと言われていたものです。そんな大事なものをらせて頂くということで、それだけで感激したのでありますが、まさかこれに角筆の書き入れがあるとは私も予想もしていませんでした。

ところが開けてみましたら、10巻のうち2巻は傷んでいたから、手をつけないことにしまして、8巻を開けたら、8巻に全部角筆の書き入れが見つかった。その中で特に『瑜伽師地論』は、最初から最後までヲコト点や仮名がついていたということで、

びっくりしたと言いますか、身体が震えたという記憶があります。

趙先生も大変喜んで下さったわけでありますが、この10巻の1包みは、趙先生は世界的に有名な韓国の蔵書家ですから、ヨーロッパや日本からよくこの初雕高麗版を見せてもらいに行くのだそうです。その時には先ずこの1包み、10巻を、どなたにも見せるのだそうですから、相当大勢の人がこれをご覧になったわけですが、角筆の凹みには、ついに今までは誰も気づかなかったということのようであります。

- ⑨ これは巻末の尾題であります。
- ⑩ これは本文の部分でありまして、ここに角筆の「十」という字があります。これはもともと「中」という字であります。日本語の助詞の「に」に当たる仮名であります。「中」という字を草書でこう書きまして、それを更に崩すと「十」になります。日本の平仮名の字源の「之」という漢字が、草書化した上でカタカナの「シ」になったり平仮名の「し」になったりする、その生まれ方と非常に似ているわけであります。
- ⑪ これも仮名でありまして、この「ㇿ」というのは日本語に当てますと、助詞の「は」に当たるのです。このもとになった漢字は「隱」という字で、その阜偏（こざとへん）を草書体に崩して書くと、こんなふうになります。日本で「ア」というカタカナは、やはり「阿」の阜偏を書きますが、日本の場合にはこう書いて、更に縦線を書いてカタカナの「ア」にします。同じ発想ですけど、韓国の場合には縦線がなくて、これだけで表しています。助詞の「n」を表している仮名であります、仮名の生まれ方は日本の場合とよく似ているのであります。
- ⑫ これも仮名であります、まだ私には読み解けていません。この辺にヲコト点が沢山ついています。
- ⑬ これはその誠庵古書博物館で、まさにヲコト点が発見したその瞬間であります。この『瑜伽師地論』からヲコト点が見つかった

たという、そのときの写真であります。

- ⑭ これはそのヲコト点を、漢字を四角に見立てて、欄外に本文とは異なる符号を書き込んで示したものです。幸いなことに墨で上からなぞっているのによく見えます。日本のヲコト点の図の場合には、こういう符号の横に読み方をつけるのですが、韓国では読み方はつけずに、ただ符号だけを書いています。この符号はこの行の中の字についている符号に対して別案を、上に書き出したものです。
- ⑮ これもヲコト点であります。これは最初に点を2つ打って、それを続けて線にしたものです。韓国のヲコト点は字の外側や内側につけるのです。日本の場合には字の上につけていきます。外側につけた場合に、あまり離れますと漢字のどこに当たるかが分かりませんので、角筆でこの四角ですと書くのです。ここのところに当たりますと示すのです。こんな印も使っているのです。
- ⑯ これは誠庵古書博物館の看板であります。この先生が南豊鉉先生でありまして、檀国大学の、今名誉教授ですが、当時まだ教授で、韓国の口訣学会の会長でいらっしゃた。前からこの先生と親しくして頂いていたので、私が韓国を調査するにあたって、先ずこの先生に連絡を取ってお願いしたのです。この先生が主な大学や、この博物館を紹介して下さいました。最初先生は角筆にあまり関心を示しませんでした。何か変な凹みがある程度の方だったようです。ところが誠庵古書博物館でこの11世紀のヲコト点が見つかったから、この先生の目の色が変わりました。それから今もうどんどん研究を進めていますし、この先生を中心に、口訣学会の方々や韓国の大学院生が角筆研究に真剣に取り組み、盛り上がった状態であります。
- ⑰ この先生が誠庵古書博物館の館長さんで、趙炳舜先生であります。この博物館の創立者です。日本語が非常に達者です。80歳近い方です。良く国際電話をかけてきて、情

報を教えてください。大変な「大人」でありまして、私はもうすっかりこの先生に惚れ込んでいます。こんなすばらしい人物が世の中にいたのかと思うような、人です。

- ⑱ これはまた別の経巻でして、やはり誠庵古書博物館にあるものです。妙法蓮華経です。これはハングルが公布された1446年から間もなく印刷された15世紀後半刊の法華経であります。この横に墨で韓国の仮名を書き入れて読み方をつけた資料であります。
- ⑲ これはその奥書の部分であります。ここに「孝寧大君補／臨瀛大君璆」とあり、ハングルを創制されました世宗大王の肉親に当たる方だそうでありまして、この記録からこの経巻が15世紀の後半の印刷だということが分かるのだそうであります。
- ⑳ その法華経の中に、角筆のハングルの書き入れが見つかったのです。20箇所以上見つかりました。墨の仮名も入っているのですが、その墨を書き入れる前に、角筆のハングルが書き入れてありました。この字のところを拡大します。
- ㉑ この字です。この字の横に、カタカナの「ス」のような仮名がありますが、これに母音の「ㅣ」が付いて、「チ」という音を表しています。本文の漢字の「支」の音を示しています。これは現代の発音と違うそうでありますから、この角筆によって、15世紀の韓国の発音が分かるわけで、新しい資料になるのであります。
- ㉒ これもこの「慰」という漢字の音を、角筆のハングルで「위」と表しています。
- 以上でスライドを終わります。
- それでは後半に入ることにいたします。

五. 日本国内の角筆文献の研究資料としての価値

1. 言語文化史の価値

日本国内の角筆文献に目を向けますと、初めに挙げましたように、日本全国各地から、現時点で3,200点余りが発掘されました。まだ次々と発掘が続いています。これらを研究資料として

どういう価値があるかを考えますのに、一般論としましては、凹み文字で書かれ、今まで気づかれずに眠っていた、新しい言語資料の群れが出現したということが言えます。

これを更に絞って、特定の研究分野にこれを活用するということを考えてみますと、特に私は言葉のことを勉強していますから言葉の面で見ますと、筆で書いた文献ではなかなか現れないような、日常的な話し言葉の歴史や方言の歴史の新しい研究分野が開かれると考えるのであります。

日本では漢文を訓読する時の仮名やヲコト点などは、毛筆による白点とか、あるいは朱点、あるいは橙色などの、色で施すのが一般的です。これが800年ころからそういうふうになるわけがあります。それ以前がどういうふうには日本では訓点をつけていたのかは、これからの研究課題であります。今日は触れませんが、800年ころから色でつけるようになりますが、韓国ではそれより前に、角筆だけでつけていたわけでありす。

日本でも当初は、その角筆だけでつけていた訓点で、平安初期に白点や朱点などの色でつけるようになったために、それに伴って、角筆の凹みの点はやや用法が偏ってまいりまして、私的な、メモ的な文章を書くのに用いられるという性格を、日本では帯びてまいります。その結果としまして、毛筆で書いた文章が規範的な文章表現になりやすい、とらわれやすいのに対しまして、角筆は規範の埒外にある表現であるところの、日常的な話し言葉が現れやすいこととなります。

15年前に出版した私の本ではこの点に注目して、京都や奈良の昔の都があった地に残っている古い文献の中から150点ほどを見つけまして、それに基づいて、話し言葉の研究資料という点に重点をおいて、これを取り上げて考察したものであります。その後広島大学を定年になりましたのを機に、10か年計画を立てまして、日本全国を調査して歩くということを行いました。幸いにして8年目で、最後の沖縄県の石垣島まで歩きまして、47都道府県の全県下で曾て角筆

が使われ、そこにその土地の文献が残っているということが分かってきたのであります。

2. 方言史の開拓の試み

角筆文献に話し言葉が現れるといたしますと、地方の角筆文献には、その地方の方言が反映することが考えられます。そういたしますと、日本語の方言の歴史、方言史が開拓されるであろう予測が得られるのであります。

ここではその試みの1つといたしまして、現代の日本語方言の上で顕著な分布を見せる「買って」というのと「買うて」という、この2つの言葉に代表されるハ行四段活用動詞の連用形の音便を、例として見ることにいたします。

2-1 現代日本語方言における分布

現代の日本語方言では「買って」という促音便は、東日本で、東京の人などは「本を買ってくる」と言います。また山陰地方の鳥取と島根の一部でも「買って」という言い方をしています。それに対しまして西日本は「買うてくる」とウ音便であります。西日本は近畿地方から中国地方、四国地方全域、九州地方でこの「買うて」が行われているのであります（稿末資料Ⅲの1参照）。この図の白い地方が「買って」という促音便を用いる地方であります。黒いのが「買うて」という地方でありまして、広島県はその黒い地方で、「買うて」「言うてみい」というふうな、ウ音便である地域となっています。

2-2 江戸時代の角筆文献

これを江戸時代の角筆文献で見ますと、現代とは違った分布が得られるようであります。特に西日本にその違いが認められます。例といたしまして広島県を見ますと、広島県の角筆文献は、今まで私が調べたところで見ただけでは、現在の発音と違って「買って」という、東日本と同じ促音便の例が出てまいります。

例えばプリントのaの(1)(稿末資料Ⅲ参照)は頼山陽家の資料でありまして、その頼山陽家の資料ではいずれも「言ウテ」ではなくて、「言ッテ」のように、促音便で現れています。

安芸中野に寺子屋を開いた原野屋伊兵衛という人が寺子屋で使った教科書が、現在安芸中野の小原家に残っていますが、そこでも「誓ッテ」「傍ッテ」という促音便であります。

三原の檜崎正員という方は三原で生まれて、三原で薬屋を営み、山から薬草を取ってきて、京都や大阪に売りに行って産を成して、三原で死んだ方でありまして、墓碑銘にそのことが記されています。晩年、山崎闇斎について学を修め、その漢籍が、今三原市立図書館に残っています。その資料でもやはり「遵ッテ」というふうに、促音便であります。

また山県郡の有田という所に住んでいました志路原周見という人が、江戸時代中期の享保4年（1719）に読み、その時に書き入れた角筆でも「偈ッテ」「逆ッテ」というように、促音便であります。

ただ最後の三角印をつけた「傍ッテ」というのがウ音便になっていますが、これは語幹が「ソ」という1音節であります。促音便がウ音便に変わっていくのは、語幹が1音節の語から変化が始まって、やがて2音節、3音節の語もウ音便になっていくと説かれています。つまり歴史的に見ますと、この音便は促音便の方が古くて、それがやがて京都あたりのウ音便の勢力を受けて、徐々に地方に広がって、特に西日本の方に広がっていったというように考えられるのであります。

この変化の姿を、1つの例として、徳島県の角筆文献で見ることいたします。徳島県はご存じのように、県の中央に大きな四国山脈がありまして、その四国山脈の奥地から流れる吉野川の流域に、人家が発達していきます。また太平洋と紀伊水道に面したところに、やはり人家が発達している県であります。この吉野川上流域の資料では、やはり古い形の促音便を用いています。プリントに掲げたようであります（稿末資料Ⅲ参照）。ところが吉野川の下流域では、促音便に混じって、ウ音便も見られるのであります。更に太平洋に面した、南方沿岸部の海部郡の穴喰町の角筆文献では、全部ウ音便になっています。

この現象は吉野川の下流域とか、あるいは南の海岸地帯などは、山があるために県内を自由に交通できませんので、特に海上交通によって近畿地方と交流をしていたことに関係があるかと思えます。近畿地方のウ音便の影響が、こういう所で受け始めてきていた。そして現在はすっかりウ音便になってしまったというような変化の姿を、角筆文献が示しているように考えられます。

金毘羅宮があります香川県は、特に近畿地方との交流が多かったようでありまして、香川県の角筆文献は県内の十数か所の文献を調べましたところ、ウ音便で現れてきています。早くから近畿の影響を受けていたことが考えられるわけであります。

このような角筆文献による調査を、中国地方、九州地方から全国に広げていくことができるならば、現代語方言がどのように変遷して今日の状態になったのか、具体的に見ることができると考えられます。これは八行四段活用動詞の音便の例であります。このような事象は、現代日本語方言のいろいろな事象にわたって調べ、考察する必要があるとして、それをするならば、日本全国にわたる方言の歴史が描かれることになるであろうと思えます。

一体、日本語を研究対象とする私どもの国語学という学問は、100年前の明治時代に近代科学として出発いたしました。その時の課題が2つありました。その2つの課題が、その後の100年間、今日に至るまでの私どもの学問の研究の主流となっておりました。2つのうちの1つは、日本語の歴史的な研究であります。もう1つは現代の日本語の方言の研究であります。

この2つの100年間の研究の流れを巨視的に見ますと、この100年の研究の歩みによって、第1の日本語の歴史は、奈良時代から現代に至る実態が、基本的なところで、100年前に比べてほぼ明らかになってきてしまいました。無論、更に細かく解明しなければならない点や、新しい資料による修正、あるいは江戸時代語の総合的な研究など、今後に残された問題もあり、また新しい視点を考え出して、そこから考察すること

もあるでしょう。

2つ目の現代の方言研究も、北海道から沖縄に至る現代方言の各地の地域的特徴に基づく実態が、100年前に比べてほぼ分かって、基本的なところでは明らかになってきてしまいました。無論、更に細かく実態を調べなければならないところや、追跡調査による修正、1地域の総合的研究なども今後行われるであろうし、社会言語学など新しい視点を導入して新展開をすることもあるかと思いますが、現段階で私が感ずるところでは、これらの学問は曾ての勢いが失われているように見受けられます。もう大筋ではほぼ目的が達成されたというふうな印象を持つのであります。

この2つの研究の流れを、対象とした言語資料という点から見ますと、日本語の歴史の研究資料というのは京都と奈良という、昔の都があった所で使われて、残っている文献を対象として、それを歴史的に奈良時代から江戸時代、現代というふうに対象としてきました。言わば一部に偏って来たわけでありです。日本全国各地の方言の歴史を総合的に解明するに至っていないのであります。

現代語方言の研究は、言わば地域的な分布を主とする、空間的な研究が主であります。しかし完き言語研究としましては、時間軸を加えた、各地方言の歴史的研究も必須であります。この方言の歴史的研究の必要性は、つとに認識されていきました。しかし毛筆で書いた文献では、日本全国にわたって同じ種類の性質の文献を得ることが難しいのであります。そこに方言史を全国視野で総合的に叙述するための資料としては限界がありました。

これに対して角筆文献は、日本全国にわたって各地から大量に発掘され、調査を進めていけば、更に多くが見出される見通しがあります。文献として同じ質のものも見られます。しかも毛筆文献に比べて、土地の方言が現れやすいという利点があるわけでありです。

この方言史の研究を、これから進めるとなると、現代の方言の研究が過去100年間を要してきて、漸くここにそのおおよその姿が分かつ

たということに鑑みますと、角筆文献を先ず各地から発掘して、各地の昔の方言を調べて考察し、全国的に描いていくという方言研究も、これから100年は必要となるかもしれません。もはや1人の力の限界を越えているところでありです。

先ほど敦煌文献の話をしていました。敦煌文献は現在世界中に5万点あると言います。私はその中の70点くらいしか調べていませんが、大英図書館には1万4千点があると言われていています。パリ国立図書館には7千点あると言われていています。もとのレニングラードの東洋学研究所には1万4千点でしたか、あると言われていましたし、中国の国家図書館にも1万5千点あると言われていています。日本国内にも1千点くらい、にせものもあるそうではありますが、1千点くらいあると言われていています。これらの全部に角筆の書き入れがあるわけではありませんが、これを一応調べてみると、相当の角筆資料が見つかって、先ほど申しましたような、新しい研究資料が得られるであろうと思います。

これも私にはもはや1人でそれを調べる力はありません。日本の場合にも、あるいは敦煌文献にしても、あるいは中国大陸の各大学に残っているような文献を徹底的に調べることを考えますと、もう私にはもちろん残された時間はありません。ここには組織化された研究集団が望まれるのであります。

最後に、地方の角筆文献は、今まで私は発掘の効果を高めるために、見つけやすい種類のものに限って、書庫に入って調べました。それは何かと言いますと、中国古典の『論語』とか『古文真宝』などの漢籍を、主な対象として調査してまいりました。これはありがたいことに多くの図書館の館長さんが、本当は書庫に入れることはできないけれども、私と一緒に入ったというかたちで見て下さいということで、書庫に入ります。書庫に入りますと、大体何となく角筆のありそうなところに足が行くのであります。そのところは大体漢籍であります。『論語』とか『古文真宝』とか、そういうものがあるところでありまして、そこには必ず見つかるのです。

今まで外れたためしがありません。それほどかなり広く使われたということだろうと思います。

こういうものを狙って調査しまして、古文書だとか経典のたぐいは、ほとんど調査していません。ですが最近は古文書からも発見が始まりました。経典からもどんどん見つかっています。今度それらを対象にして、もう1回日本中を探し歩く必要がありますが、あと10年かかりますので、私にはもうそれはできないのであります。こういうことで漢籍を中心に調べてまいりました。

その漢籍というのは、江戸時代のものが主でありまして、特に、もちろん鎌倉時代、室町時代のものもありますが、多くの全国的に見られるのは江戸時代のものであります。それは江戸時代の三百諸侯と言われる大名が、藩士の子弟を教育するために藩校という学校を設けて、そのテキストとして、この漢籍が使われたわけがあります。更に大名の藩校に倣って、郷の学校、

郷校が作られます。徳島県にもその資料が残っています。それから庶民の間では寺子屋が設けられて、その教科書として、この漢籍が使われます。そこに角筆の書き入れが多く認められたわけであります。

私は自分の専攻の立場から、これらを言語資料としての面に重点を置いて、説いてまいりました。しかしその教科書とそこに用いられた角筆の言葉を通して、言語資料以外としても、例えば近世の教育史の具体的な資料としての価値を見出すこともできると考えております。学際的な研究も必要になると思われるのでありまして、このことを言い添えまして、本日の私の発表を終わらせて頂きます。ご静聴ありがとうございます。



資料I

1、角筆の文字

- (1) 對仏弟子不共不定(第十一節引)
- (2) 法處所攝不待根故(第十節引)
- (3) 共(見母等、鍾韻)・宮(見母等、東韻)
- (4) 共(見母等、鍾韻)・宮(見母等、東韻)
- (参考) 開蒙要訓(敦煌文獻)・蜂風(蜂、鍾韻、風、東韻)
- (参考) 觀音經(敦煌文獻)・羅刹鬼國(利、點韻、切、屑韻)

2、角筆の節博士(B型)行間に書入れた譜

節博士は、仏教の儀式・法要において僧の唱える声楽である声明の歌詞の傍に、その高低や長短の旋律を表した譜。日本では、十世紀に天台宗の僧が使い始めた。

依聖典(廻向偈二行)

劇於地(三行) 六藏性(三行) 有差別(第十節引) 脚場(一行)

極成(三行) 所依根(三行) 餘不定(三行) 依偏(二行)

雜亂(三行) 問意(三行) 尖脚(三行) 願(獨一行)

必有(三行) 此等難行(三行) 甚(獨一行) 弘道(獨一行)

3、角筆の声調符(声点)

声点は、漢字の声調(アクセント)を示すために字の四隅などに書き加える記号。日本では、九世紀末〜十世紀初めに天台宗比叡山の僧が使い始めた。

- (甲) 由一向離故(第十節引) (乙) 足作不定(第八節引)
- (丙) 以未成仙有情攝故(第十節引) (丁) 為避此(第十節引)

4、角筆の合符

合符は、漢字二字などが一つの単語又は一つの概念を表すことを示す記号。日本の合符とは異なり、朝鮮半島で用いられた縦長線が使われている。

- α 是聖教故(第九節引) (β) 此非不定(第十節引)
- 以有心故必當作仏(第十三節引)
- 今者別立(第十節引)

5、角筆の節博士(A型)横長の波線

日本では使用例が管見に入らない。韓国では十一世紀の初彫高麗版などに角筆で施されている。

(返点と左傍点線は私に施したもの)

- (1) 謂此聲無常所見造改(第十節引)
- (2) 彼二湖河湖(第十節引)

6、大谷大学蔵 判比量論の書写と伝来

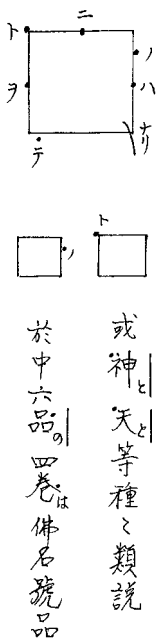
- ① 正倉院文書の初見—天平十二年(七四〇)。
- ② 大安寺僧審祥の新羅留学とその蔵書。

- (1) 天平十二年始撰之有方是書詳六十六卷新羅學士安奇審祥和尚所撰端以之還初撰此宗(凝然・國傳法傳通錄起。卷中、審祥宗)
- (2) 五月廿七日綱摩訶衍起信論別記(卷、白紙、元號、已巳也、還書、審祥)右依今日從審祥大德所請來使安奇審祥受通定(天平十六年、律師疏長傳書本收納并送法帳)
- (3) 判比量(卷、略)右(神護景雲二年二月十四卷審祥所撰)
- (4) 合終論律章疏果早地(宣伯制拾深卷、並審祥所撰)右判比量(卷、神護景雲二年十一月十三日、還書、全寺の勝)

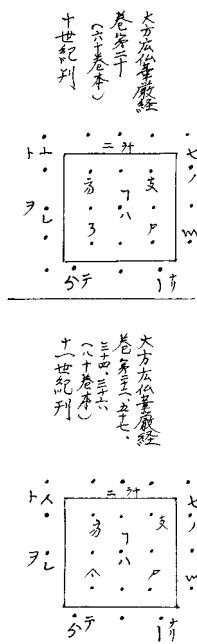
資料II

1、佐藤本華嚴文義要決のヲコト点(日本におけるヲコト点使用の始まり)

ヲコト点は、漢文を訓読するのに漢字の字面に「・」「ゝ」「ㄣ」などの印を書き加えて、その形と位置によって一定のよみ方を示した符号。



2、朝鮮半島の華嚴經（誠庵古書博物館蔵）に角筆で施されたヲコト点（点吐）

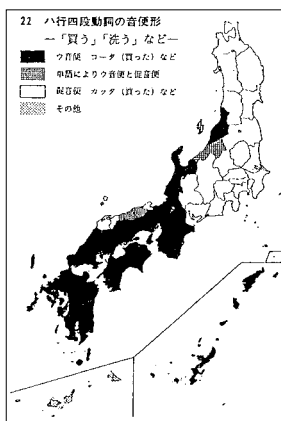


3、佐藤本華嚴文義要決の合符と返読符

十地論云何故不初七日說思惟行因緣行故

資料Ⅲ

1、現代日本語方言における分布

『日本方言大辞典』（小学館）
附録「音韻総覧」

2、江戸時代の角筆文献に現れた分布

a、広島県—促音便（買ッテ等）

- (1) 賴家資料(賴山陽史跡資料館寄託)
○小字 内篇 外篇 二冊 江戸中期刊 賴元鼎手沢本(元化二年二五十六歲跋)
略 言下 教皇手 酒橋元村事(長之部)(外篇 云々)
○四書白文 二冊 慶安手(五十三)
季氏旅 於泰山子謂(有)曰女弗能收歟(論語セオ)
(2) 安芸中野 原野屋伊兵衛資料(小原千秋氏蔵)
伊兵衛は元元年(八二二)十五歳で此の地(小原屋)開き、明治初年まで続行氏
錦織段 一冊 寛文五手(六六)刊 伊兵衛の書入札
普請手角 梓園奴(不)顧其身(三才才)
普請手角 船帰(甲五才才)
現艇傍に

b、徳島県—促音便（買ッテ）からウ音便（買ウテ）へ

- (3) 備後國三原 楠崎正貞資料 (三原市立圖書館藏楠崎文庫)
楠崎正貞 (一六〇一—一六九二) は三原に生れ、藩屋を営み、三原に没した。晩年学究す。
○中庸書 (一冊) 江戸初期刊 楠崎正貞手沢本
君子 道而行 (九ノウ)
- (4) 安芸国山県 志路原周見資料 (広島市立中央図書館蔵小田文庫)
志路原周見は山県の人。享保四 (一七九三) 二月廿八日、説之事神田周見本 (里書)
○三休詩 三冊 元禄十六年 (一七〇三) 刊
水心 傳 為「晚唐律之說上」 (卷六、二ノウ)
イサノ書
江樹 逆 潮歌 (卷下、三三ノウ)
- 空傍 漢宮流 (卷中、四ノウ)
- 德島県 促音便 (買ッテ) からウ音便 (買ウテ) へ
- (1) 吉野川上流 成 (三好郡三好町) 資料
○古交宝復集 二冊 延宝五年 (一六二七) 刊 (三好中央公民館蔵瑞瑞光寺文庫)
濯 清蓮 (範、三三ノウ)
克 念 (陳、五ノウ)
選 世 園 極 (範、十ノウ)
- (2) 吉野川下流 成 (阿波郡方場町 徳島市 鳴門市)
○小字句読 四冊 元禄六年 (一六九三) 刊 (阿波郡方場町尊光寺蔵)
洗 而以請 (卷三、五ノウ)
偷 私意 (卷五、三ノウ)
- 三休詩 三冊 元禄八年 (一六九五) 刊 (徳島市立図書館蔵森文庫)
○當 浮雲 (第一冊、六ノウ)
- 孟子道奮点 一冊 江戸中期刊 (鳴門市 鳴門市昌住寺蔵)
救 死 (一ノウ)
- (3) 南方沿岸部 (海部郡桑喰町)
○古交宝全集 二冊 元禄二年 (一六八七) 刊 (海部郡桑喰町桑喰寺蔵、同町真福寺蔵)
○舖 其 卷上、五ノウ
○世 世 卷上、十ノウ

海外研修出張報告

～大韓民国の大学図書館～

附属図書館ではこのほど、「学術情報の電子化と情報発信体制等の調査」という研修課題により広島大学後援会の平成14年度国際交流助成金を得る事ができ、情報管理課の土肥図書館専門員と情報サービス課の川上が大韓民国へ研修出張に行ってきましたので、この場をお借りして報告します。

韓国へは、2002年8月26日(月)から8月31日(土)までの日程で渡航しました。目的地はソウル大学校中央図書館と慶北大学校中央図書館です。ソウル大学校図書館は韓国の大学の頂点に位置する学府の図書館として、その名をよく知られているところです。また慶北大学校と広島大学とは近年、学生交流の大学間協定を結びましたが、図書館同志も2002年1月に「図書館交流に関する協定」を締結したところであり、2002年の春には慶北大学校図書館から3人の職員を研修にお迎えしたのに引き続き、今度は私たちが訪問することになったものです。後になって聞いた事ですが、慶北大学校の所在地であるテグ市は広島市と姉妹都市縁組をしており、広島とは少なからぬ縁があるのでした。

さて、慶北大学校図書館には日本語を読み書きできる職員がおられて、事前のFAXや電子メールのやり取りは日本語で不自由しませんでした。ソウル大学校図書館との打合わせは慶北大学校図書館の方に間に入って貰っても円滑に進まず気を揉みました。ソウル大学校図書館での通訳の手配もままならないまま、周到な準備が整わないと不安が拭えない川上と、なんとかなるだろうと楽観的な土肥を乗せて広島空港を飛び立った飛行機は、無事にソウル仁川空港に到着したのでした。

ソウル大学校中央図書館

ソウルのホテルにチェックインを済ませた後、翌27日のソウル大学校図書館訪問に備えて、行き道の下見に出かけました。訪問当日は安全を見てタクシーで行く事にしていましたが、下見は時間に余裕があるので地下鉄と徒歩で行ってみることにしました。なんとか大学正門に着い

たものの守衛さんに言葉が通じず、図書館までの下見は叶いませんでした。

次の日27日の朝は土砂降りの大雨です。タクシーの運転手に日本語が通じたおかげで図書館の下で降ろして貰う事ができましたが、どこが正面玄関かなかなか判らず、建物に入るまでの間にびしょ濡れになってしまいました。なんとか気を取り直して受付で取次ぎをお願いしましたが全然通じません。難渋した末、面会を約束していたペク課長に会うことができました。幸運にも、職員の中に慶応義塾大学大学院に留学していたホンさんがおられ、その方に通訳と案内をして頂きました。

一通りの説明を受けた後、館内の見学をさせて頂きました。目に付いたのは利用者用パソコンの多さでした。膨大な数のパソコンを図書館で管理していて、その席のほとんどが利用者で埋まっています。パソコンをコントロールするサーバ群（撮影禁止）も凄まじく、背よりも高いラックが5つも6つもあります。サーバ室に入室する際には記帳を求められました。

対照的なのは新着雑誌室です。雑誌をデュウイ十進分類法で並べていました。探しにくいように思えますが、利用者は慣れているので問題ないそうです。それでも新着雑誌室には職員が詰めていました。学位論文室にも驚かされました。貸出しはしていませんが、学内外からの利用が非常に多く、専門の職員が出納を行っています。



学位論文室

古書室では、ソウル大学校の前身である京城帝国大学時代の和書蔵書を調査中の、九州大学の松原教授にばったり出会いました。日帝植民支配時代の蔵書を粗末にすることなく、照明を落として大事に保管しています。既に日本国内からなくなってしまった絵草紙も含まれるとのことでした。

まだまだ見所はありましたが、先を急ぎましょう。

慶北大学校中央図書館

次の28日はソウル金浦空港から国内線でテグ市まで移動しました。二人とも海外は初めてですが、言葉が通じないなど言っていない。

テグ空港に降り立つと、慶北大学校図書館の方2名が出迎えにいられていました。男性のチェさんと女性のチェさんです。二人にはテグを離れるまでずっとお世話になりました。女性のチェさんは日本語が上手で、通訳をお願いしました。

その日は大学のゲストハウスに直行させて頂くつもりでしたがそうはいかず、早速館長先生に御挨拶をしに行く事になりました。現在のキム館長は6年目、研究室にいるより館長室にいる事が多く、前任者の頃には70万冊だった蔵書が、館長の努力により170万冊に増えたそうです。その夜は館長の招待で韓定食の歓待を頂きました。



慶北大学校中央図書館正面

翌29日と翌々30日は、中央図書館と医学大学分館で研修と見学をさせて頂きました。

早朝の中央図書館では、新学期が始まったばかりという事を割り引いたとしても、利用者数の多さに驚かされました。開館直後から学生がどんどん入館し、閲覧席・パソコンデスクが埋まっています。ここでも大量の利用者用パソコンを設置しており、70台を図書館で管理していました。利用者が多ければ貸出図書、返却図書も増えます。開架図書室には、配架を待つ返却図書の山が4箇所もありました。



配架を待つ返却図書の山

これだけ多い図書利用を支えるために、一つのタイトルにつき3冊の複本を購入しています。宗教関係は2冊としていました。図書の寄贈依頼も積極的に行い、2001年は45人からの寄贈を受けていました。既に所蔵している図書が寄贈図書に混ざっていた場合は、他の大学図書館に所蔵を照会して譲るようになっています。図書館の命はコレクションの構築である事を、まさしく体現していると感じました。

利用者が多ければ、中で働く館員も多く、50人の正規職員が中央図書館で働いています。その他に学生アルバイトらしき若者を多数見かけ、彼らの事を尋ねると、「軍隊サービス」だと教えてくれました。徴兵検査で不合格になった若者は、2年間強の徴兵期間と同じ長さだけ社会奉仕をしなければならず、それを軍隊サービスと称しています。その若者たちが50人程図書館にいたとのことでした。軍隊サービスの話はソウル大学校図書館でも聞き、徴兵制度はこういう所で役に立つものなのかと感心しました。

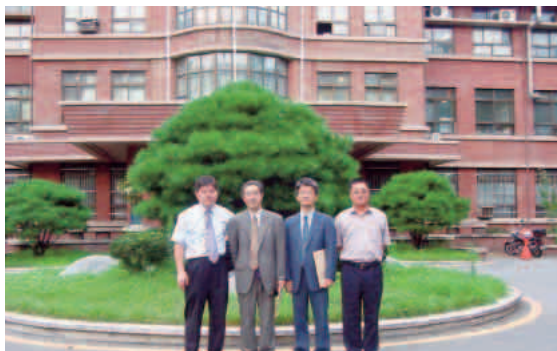
注目の電子計算機部門では、またまた圧倒されました。ソウル大学校図書館に負けず劣らずの設備です。慶北大学校の博士論文、修士論文等2万本以上をイメージ化してのサービスもしています。広大図書館にあるのと同じCD-ROMサーバも倍以上の規模でした。広大でつい最近故障したことを話すと、慶北大学校でもよく壊れると笑っていました。ARL、Blackwell、CSA、EBSCO、MCB、IDEAL、IEL、InfoTrac、INSPEC、JCR、Kluwer、LWW、MLA、Nature、PQDD、ScienceDirect、SciFinder、Springer、Wiley、Web of Science等のオンラインサービスが当然のように導入されています。無線LANも整備済みで、地上1階から4階までと図書館周辺で利用が可能になっていました。頭がくらくらするようでした。

古書室にも案内して頂きました。60000冊の内14000冊が寄託で、寄託を寄贈にして貰うのはなかなか難しいと話していました。古文書、刊本だけでなく、版木も収集して保存しているのには唖らされました。ここでも専門の職員が一人詰めていて、整理や保存対策を行っていました。



古書室展示コーナー

中央図書館に引き続いて医学大学分館で研修を行いました。分館は市の中心地にあり、車に乗せて貰っての移動です。医学大学の前身は戦前に日本人が設立した医学学校で、当時の卒業生名簿には日本人の名前も残っています。新しい研究棟・病院棟も建っていますが、前身校設立当時の建物もそのまま使用しています。建物自体が価値のある文化財で、解体して引き取りたいと日本の企業が大学に申し出たことがあるそうですが、断ったとの事です。医学大学分館はその建物の中にあります。古い建物の狭いスペースで不便そうに見えましたが、キム館長は建物をそのままの形で使用し続けたいと言っていました。



医学大学の前で（左からチェさん、土肥、川上）

医学大学分館の見学の後、近くにあるテグ市立図書館に案内して頂きました。ここでも、旧日本軍が残して行った戦前の日本の図書が、古書室で大切に保管されていました。パソコンに取り付いている子ども達の姿も印象的でした。



テグ市立図書館でパソコンに取り組む子ども達

さて、研修最終日の夕方になって心配事が持ち上がりました。台風が近づいているのです。翌朝にテグに接近するコースで、悪くすると帰りの飛行機が飛びません。はらはらしながら31日の朝を迎え、テグ空港まで二人のチェさんに送って頂いて搭乗手続きを済ませました。既にプサンの空港発着便は全て欠航です。テグ空港でも、私たちが乗った便を最後に欠航になりました。台風に追われるようにして金浦空港に到着した後、すぐに仁川空港まで移動し、その日の内に無事広島空港まで戻ってきました。

結び

韓国の図書館を見てきて強く印象に残ったのは、情報技術にふんだんに資金を使うだけでなく、人とモノにかかる資金も惜しまない姿勢でした。私たちは、ともすれば技術は合理化・省力化の手段として捕らえがちになりますが、韓国の図書館の方たちは、進んだ情報技術は、それはそれで必要であるとして整備を進める一方、図書館という存在が過去を捨てずに積み上げてきたモノをこの現代でサービスし、そしてこれからも積み上げていくためには人とモノに資金が必要であることを認識し、それをしかるべきところにきちんと主張して理解を得ていると感じました。ソウル大学校図書館やテグ市立図書館の日本の古い書物、慶北大学校医学大学棟にたどることが出来るものを、私たちはどれだけ持ち合わせているだろうかとの思いに駆られました。情報技術の視察に出かけて、その情報技術の対極ともいえる副次的収穫を得、韓国から戻ってきたのでした。

最後になりましたが、今回の私たちの海外研修出張にご尽力くださった、広島大学後援会および宮澤館長、由良部長をはじめとする広島大学附属図書館の皆様にご挨拶申し上げます。

（電子情報係 川上 裕）

OCLC との ILL システム間リンクの運用開始について

国外文献入手のための新しいシステムが、導入されました。

国立情報学研究所の NACSIS-ILL システムと米国 OCLC Online Computer Library Center, Inc. の ILL システムのリンクによる国際 ILL (文献複写のみ) の試行運用が平成14年4月より開始されました。

これは、国立大学図書館協議会が提唱するグローバル ILL フレームワークの構想と、国立情報学研究所の ISO プロトコルによる ILL システム間リンクの開発と運用、及び米国学術図書館協会 Association of Research Libraries 及び North American Coordinating Council on Japanese Library Resources の Global Resources Program/ Japan Journal Access Project との協力により実現したものです。

長年の懸案事項であった料金決済についても、文献複写徴収猶予対象の海外機関への拡大や、第三者機関による決済方式により、料金支払い及び徴収が簡便な方法で実施できるようになりました。

NII-OCLC の ILL システム間リンクには、米国

側は30大学・31図書館が参加しています。(平成15年2月1日現在)

この ILL システム間リンクにより、学術文献の海外からの入手先の拡大と日本の学術文献の海外発信の促進が可能になりました。多くの図書館が、国際 ILL と学術文献流通の促進のため、このリンクを活用されています。

このシステムを利用すると、国外文献が1～2週間程度(例外もありますが)で入手できます。料金は一定ではありませんが、校費での支払いが可能です。

このシステムに加入している米国大学図書館 OPAC で所蔵が確認できれば、システムからの文献依頼が可能です。

OCLC-ILL システムは、GIF プロジェクトが実際の運営に携わっています。この件に関しては、GIF ガイドをぜひご覧ください。URL は、以下のとおりです。

URL = <http://www.libra.titech.ac.jp/GIF/>

このサービスは、現在中央図書館・医学分館で実施しています。

(情報サービス課 倉田英子)

米国側参加館 & OPAC Address リスト

No.	Library Name	OPAC Address
1	Amherst College Library	fclibr.library.umass.edu
2	Bates College-Ladd Library	ladd.bates.edu
3	Brigham Young University Lee Library	www.lib.byu.edu
4	Columbia University Libraries	www.columbia.edu/cu/lweb/eresources/clio.html
5	Duke University Libraries	www.lib.duke.edu/online_catalog.html
6	Haverford College Libraries	tripod.brynmawr.edu/
7	Indiana University Libraries	www.indiana.edu/libfind/
8	Mount Holyoke College Library	fclibr.library.umass.edu
9	Ohio State University Libraries	library.ohio-state.edu/search
10	Pennsylvania State University Libraries	www.lia.psu.edu/
11	San Diego State University Library	libpac.sdsu.edu
12	Smith College Libraries	fclibr.library.umass.edu
13	Texas A&M University Corpus Christi-Mary&Jeff Bell Library	portal.tamucc.edu
14	University of Alaska, Fairbanks-Elmer E. Rasmuson Library	—
15	University of Calgary Library	seter.lib.ucalgary.ca/uhtbin/webcat/
16	University of California-Los Angeles Library	www.library.ucla.edu
17	University of California-San Diego Libraries	roger.ucsd.edu
18	University of California-Santa Barbara Libraries	www.library.ucsb.edu
19	University of Hawaii at Manoa Libraries	uhmanoa.lib.hawaii.edu
20	University of Iowa Libraries	infohawk.uiowa.edu/ALEPH
21	University of Kansas Libraries	catalog.lib.ku.edu
22	University of Massachusetts/W.E.B. Du Bois Library	http://umlibr.library.umass.edu/
23	University of Missouri-Columbia Libraries	mulibraries.missouri.edu/
24	University of North Carolina at Chapel Hill Libraries	web2.lib.unc.edu
25	University of Oregon-Knight Library	janus.uoregon.edu/screens/opacmenu.html
26	University of Pittsburgh Libraries	www.library.pitt.edu
27	University of Virginia Library	www.lib.virginia.edu
28	University of Washington-Gallagher Law Library	marian.law.washington.edu
29	University of Washington-Suzzallo Library	www.lib.washington.edu/
30	University of Wisconsin-Madison General Library System	madcat.library.wisc.edu
31	Yale University Library	orbis.library.yale.edu

2001年度図書館統計

2002年度大学図書館実態調査による

1. 蔵書統計

	図書			雑誌			その他		
	全蔵書	和書	洋書	全種類数	和	洋	学位論文	科研報告	電子J
中央図	1,944,983	1,199,124	745,859	30,303	17,395	12,908	5,954	1,500	2,955
東 図	326,165	178,243	147,922	9,187	4,578	4,609	0	0	0
西 図	542,197	301,735	240,462	3,930	1,442	2,488	0	0	0
医学分館	207,208	100,256	106,952	8,568	4,011	4,557	0	0	0
東千田	17,456	17,331	125	251	249	2	0	0	0
計	3,038,009	1,796,689	1,241,320	52,239	27,675	24,564	5,954	1,500	2,955

2. 年間受入数

	図書(冊)			雑誌(種)			視聴覚資料		
	総受入数	和	洋	総受入数	和	洋	ビデオテープ	CD/LD/DVD	CD-ROM
中央図	45,387	32,749	12,638	10,976	5,898	5,078	16	9	8
東 図	5,305	3,024	2,281	3,123	1,330	1,793	0	0	8
西 図	8,620	5,563	3,057	881	434	447	4	0	0
医学分館	5,117	2,492	2,625	2,002	754	1,248	5	0	3
東千田	748	721	27	32	31	1	0	0	0
計	65,177	44,549	20,628	17,014	8,447	8,567	25	9	19

3. 館外貸出冊数

	総冊数	学生	共用学生	教職員	学外者	入館者数
中央図	93,952	87,256	0	5,096	1,600	387,846
東 図	28,744	26,676	0	1,747	321	96,535
西 図	37,322	35,022	0	2,019	281	281,888
医学	18,668	15,775	159	2,313	421	153,966
東千田	9,225	8,582	0	395	248	41,767
計	187,911	173,311	159	11,570	2,871	962,002

4. 参考業務

	レファレンス利用者別				業務内容別			
	総件数	学内者		学外者	文献所在 調 査	事項調査	利用指導	その他
		教職員	学生					
中央図	6,790	1,358	4,888	544	3,123	918	2,716	33
東 図	2,816	312	2,353	151	844	564	1,408	0
西 図	4,706	283	4,094	329	2,852	62	1,792	0
医学	4,928	1,846	2,825	257	2,968	469	1,491	0
東千田	804	80	628	96	804	0	0	0
計	20,044	3,879	14,788	1,377	10,591	2,013	7,407	33

注：その他の33件は情報検索

5. 図書館間相互協力

国内	図書の貸借		(冊数)			
	大学図書館		その他		貸出計	借受計
	貸出	借受	貸出	借受		
中央図	1,706	1,412	94	105	1,800	1,517
東 図	187	52	3	3	190	55
西 図	339	194	2	4	341	198
医学	73	196	0	0	73	196
東千田	159	344	1	0	160	344
計	2,464	2,198	100	112	2,564	2,310

	文献複写(件数)					
	大学図		その他		受付計	依頼計
	受付	依頼	受付	依頼		
中央図	5,550	6,043	222	290	5,772	6,333
東 図	4,322	2,565	149	84	4,471	2,649
西 図	3,465	2,283	50	59	3,515	2,342
医学	7,127	5,492	214	100	7,341	5,592
東千田	71	221	0	0	71	221
計	20,535	16,604	635	533	21,170	17,137

国外	図書の貸借		文献複写	
	貸出	借受	受付	依頼
中央図	0	75	4	394
東 図	0	0	0	39
西 図	0	5	0	132
医 学	0	0	0	26
東千田	0	0	0	0
計	0	80	4	591

6. 図書館の公開(人)

利用者は入館者数

	外の大学の学生	外の大学の研究者	大学以外の研究者	その他一般市民	計	登録者数	貸出冊数
中央図	1,006	93	138	1,319	2,556	572	1,131
東 図	61	17	163	40	281	8	154
西 図	710	355	64	139	1,268	9	141
医 学	1,126	140	4,168	98	5,532	68	329
東千田	752	158	40	2,889	3,839	104	220
計	3,655	763	4,573	4,485	13,476	761	1,975

2002年度図書館活動記録

—2002年3月～2003年2月—

1. 学外諸会議等

3月

- 1日 国立大学図書館協議会海外派遣審査会議
(愛媛大)

4月

- 16日 電子ジャーナルタスクフォース (東大)
24日 中国・四国地区大学図書館協議会
(26日まで高知大)

5月

- 13日 広島県大学図書館協議会研修企画委員会(広大)、
広島県大学図書館協議会幹事館連絡会議(広大)
21日 国立大学附属図書館事務部課長会議 (NII)
22日 文部科学省会議 (NII)
国大図協議会受賞者選考委員会(13年度第3回)
(東京大学)
23日 国立大学図書館協議会理事会 (13年度第4回)
(東京大学)
平成14年度第2回電子ジャーナル・タスクフォース会議
第73回日本医学図書館協会総会及び司書会議
(愛媛大学) 24日まで
31日 日本薬学図書館協議会近畿・中国・四国地区協議会総会 (広島大学)

6月

- 14日 広島県大学図書館協議会総会(エリザベト音大)
26日 第49回国立大学図書館協議会総会 (鳥取大学)
～27日まで

7月

- 2日 第二回学術情報発信に向けた図書館機能改善連絡会 (NII)

8月

- 2日 平成14年度第1回広島県大学図書館協議会研修会 (安田女子大)
26日 法人格取得問題に関する附属図書館懇談会
(第5回) (東京大学)

9月

- 19日 平成14年度第2回広島県大学図書館協議会研修

会 (立志館大学)

- 24日 「来(ら) いぶらりネット」稼働式
(広島県立図書館)

10月

- 8日 平成14年度(第5回)電子ジャーナル・タスクフォース会議
10日 平成14年度国立大学図書館協議会中国四国地区協議会実務者会議(岡山大学)
11日 国立情報研究所メタデータ・データベース共同構築事業説明会 (九州大学)
23日 第43回中国四国地区大学図書館研究集会
(山口大学)
25日 平成14年度日本医学図書館協会第2回企画・調査委員会 (大阪市立大学)
29日 第3回学術情報発信に向けた図書館機能改善連絡会 (NII)
31日 国立大学図書館協議会受賞者選考委員会
(東北大学)
国立大学図書館協議会理事会 (東北大学)

11月

- 1日 平成14年度第4回理事会・第3回評議員会
(日本医学図書館協会)
7日 平成14年度中国四国地区国立大学附属図書館事務(部・課)長会議(岡山大学)
8日 平成14年度第3回広島県大学図書館協議会研修会 (県立広島女子大学)
14日 第38回日本医学図書館協会中国・四国部会総会
(岡山大学)

12月

- 1日 広島高等師範学校創立100周年記念式・講演会
(教育学部主催)
5日 第15回国立大学図書館協議会シンポジウム西地区 (九州大学)

1月

- 23日 平成14年度国立大学附属図書館事務部課長会議
(岐阜大学附属図書館)

2月

- 13日 学術情報発信に向けた図書館連絡会

17日 国立情報学研究所講習会担当者会議

2. 学内諸会議等

3月

11日 運営諮問会議
18日 事務研修会
19日 部局長会議 評議会
26日 事務連絡協議会
第10回事務機構改革実施案策定 WG

4月

9日 部局長会議
16日 評議会
23日 事務研修会 事務連絡協議会

5月

8日 第11回事務機構改革実施案策定 WG
13日 第12回事務機構改革実施案策定 WG
14日 50年誌編集委員会幹事会、情報・通信メディア委員会
財政部会 部局長会議
事務組織全体検討専門部会
20日 第13回事務機構改革実施案策定 WG
21日 評議会
27日 第14回事務機構改革実施案策定 WG
28日 情報・通信メディア委員会
独立法人化事務調査検討委員会
事務連絡協議会：事務研修会

6月

3日 第15回事務機構改革実施案策定 WG
4日 広報委員会
10日 第16回事務機構改革実施案策定 WG
11日 財政部会
12日 第28回50年史幹事会
16日 第17回事務機構改革実施案策定 WG
18日 第3回セキュリティポリシー策定部会
部局長会議 評議会
23日 第18回事務機構改革実施案策定 WG
25日 事務連絡協議会：事務研修会

7月

1日 第19回事務機構改革実施案策定 WG
2日 第4回広報委員会
9日 臨時評議会 部局長会議
15日 第20回事務機構改革実施案策定 WG
第一回 IT 関係意見交換会
16日 評議会
19日 事務研修会：事務連絡協議会
21日 第21回事務機構改革実施案策定 WG
22日 第22回事務機構改革実施案策定 WG
23日 第57回情報通信・メディア委員会
24日 事務組織全体検討専門部会
29日 第2回 IT 関係意見交換会
31日 文書館 WG 打ち合わせ会

8月

5日 第23回事務機構改革実施案策定 WG
9日 文書館 WG 打ち合わせ会
19日 第3回 IT 関係意見交換会
22日 第3回文書館 WG 打合せ

9月

4日 第4回 IT 意見交換会
6日 事務組織全体検討専門部会

10日 部局長会議

12日 第5回運営諮問会議

20日 第5回 IT 意見交換会
事務機構改革検討委員会
事務連絡協議会：事務研修会
24日 評議会

10月

1日 第24回事務機構改革実施案策定 WG
2日 高度生涯学習支援システム実行委員会
8日 部局長会議
10日 第25回事務機構改革実施案策定 WG
15日 評議会
18日 事務組織全体検討専門部会
事務連絡協議会：事務研修会
22日 第59回情報・メディア委員会
23日 第26回事務機構改革実施案策定 WG
第1回事務機構改革実施案策定 WG リーダー会議
25日 事務組織全体検討専門部会
28日 第2回事務機構改革実施案策定 WG リーダー会議
教育 IT に関する検討 WG
29日 学習支援サービス検討 WG

11月

1日 第1回事務機構改革実施案策定 WG 情報政策室サブ WG 会議
2日 第3回事務機構改革実施案策定 WG リーダー会議
6日 第3回高度生涯学習支援システム実行委員会
8日 教育 IT に関する検討 WG
12日 第60回情報・メディア委員会
部局長会議
学習支援サービス検討 WG
13日 教育 IT に関する検討 WG
19日 評議会
21日 第2回事務機構改革実施案策定 WG 情報政策室サブ WG 会議
学習支援サービス検討 WG
22日 事務連絡協議会

12月

10日 第62回情報通信・メディア委員会
部局長会議
第5回学習支援サービス検討 WG
12日 第3回事務機構改革実施案策定 WG 情報政策室サブ WG 会議
16日 第6回広島大学運営諮問会議
17日 事務研修会
20日 平成14年度第7回図書館事務連絡会議
附属図書館広報委員会
第7回附属図書館収書事務委員会
IC カード検討 WG(情報メディア教育研究センター)
事務連絡協議会
50年史編集幹事会
第1回法人化対策会議幹事会・情報政策室サブ WG 合同会議
24日 第6回学習支援サービス検討 WG
26日 第30回評議会
1月
6日 IT 教育関係意見交換会
7日 第10回広報委員会

- 10日 事務組織全体検討専門部会
 14日 第60回情報・メディア委員会
 (情報メディア教育研究センター会議室)
 第7回学習支援サービス検討共同WG
 (情報メディア教育研究センター会議室)
 17日 第2回法人化対策会議幹事会・情報政策室サブWG 合同会議
 21日 評議会
 22日 第4回事務機構改革実施案策定WG リーダー会議
 23日 第4回地域貢献実行委員会
 (情報メディア教育研究センター)
 24日 事務連絡協議会
 事務組織全体検討専門部会
 27日 第3回法人化対策会議幹事会・情報政策室サブWG 合同会議
2月
 4日 第10回広報委員会
 14日 第99回事務組織全体検討専門部会
 17日 第4回法人化対策会議幹事会・情報政策室サブWG 合同会議
 18日 部局長会議、評議会
 第66回情報通信・メディア委員会
 第4回ICカード検討WG
 20日 第3回法人化対策会議幹事会・情報政策室サブWG 合同会議
 28日 事務連絡協議会

3. 来館者・見学者

- 3月**
 1日 国立情報学研究所 (2名)
 4日 北見工業大学 (3名)
 5日 文部科学省高等教育企画課 (3名)
 6日 静岡大学 (3名)
 7日 千葉大学 (2名)
 14日 大阪大学 (2名)
 26日 愛知教育大学 (3名)
4月
 26日 広島大学附属東雲中学校2年生 (87名)
 27日 放送大学学生 (20名)
5月
 17日 広島大学キャンパスツアー 図書館見学 (13名)
6月
 4日 アメリカ大阪領事館広報担当 (1名)
 20日 広島県立賀茂高校 PTA (40名)
 24日 フルブライト・メモリアル基金アメリカ人教育者 (20名)
7月
 1日 谷川和穂衆議院議員西図書館見学
 2日 広島県立海田高校 PTA (51名)
 4日 広島県立安佐北高校 PTA (30名)
 8日 高知県立追手前高校 PTA (9名)
8月
 22日 広島県立向原高校 PTA (20名)
9月
 10日 東広島中央公民館市民講座 (36名)
 17日 山口県立防府高校 PTA (40名)
 24日 広島県立安古市高校 PTA (60名)

- 10月**
 9日 広島県立安芸府中高校 PTA (40名)
 16日 山口県東中学校育英会 (40名)
 17日 西条ロータリークラブ (70名)
 18日 島根県立浜田高校 PTA (25名)
 22日 文部科学省御手洗審議官西図書館見学
11月
 6日 東京大学附属図書館 (3名)
 13日 広島県立三原高校 PTA (44名)
 山口県立下松高校 PTA (45名)
 14日 東京大学教養学部図書課数理学研究科図書室 (2名)
 25日 フルブライト・メモリアル基金アメリカ人教育者 (20名)
 26日 中国社会科学院中日歴史研究中心專家委員会
12月
 12日 広島大学附属三原中学校2年生 (81名)
 18日 国立情報学研究所開発・事業部 (3名)
1月
 23日 豊橋技術科学大学 (2名)
2月
 4日 国立国会図書館 (2名)
 7日 歯学視学委員 (2名) 医学分館
 13日 千葉大学 (2名)
 14日 文部科学省予算班 (1名)
 20日 長崎大学 (1名)

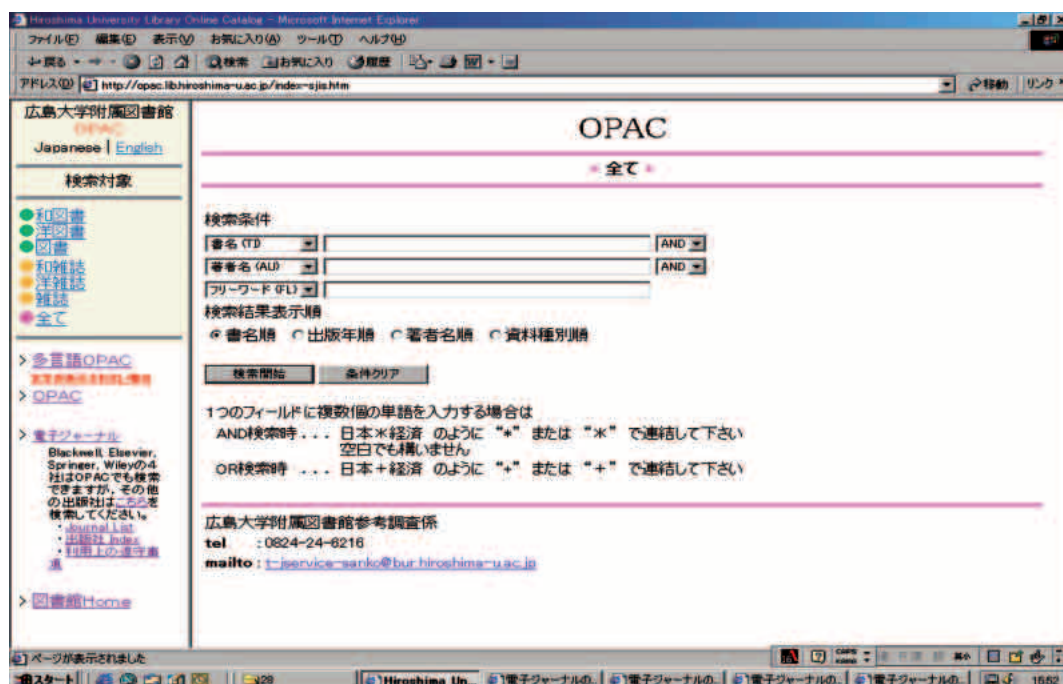
4. 館内諸会議他トピックス

- 3月**
 12日 第213回附属図書館運営委員会
 13日 ISI社「Current Content Connect」
 利用説明会 (東広島、霞地区)
 27日 図書館事務連絡会
4月
 4日 新入生対象の図書館ガイダンスを実施
 参加者2,426名
 10日 附属図書館業務電算化幹事会
 教養ゼミでの図書館利用案内を実施
 5月13日まで 全39コマ1,849名
 15日 第1回図書館電算システム仕様策定委員会
 22日 第2回図書館電算システム仕様策定委員会
5月
 7日 第3回図書館電算システム仕様策定委員会
 12日 第213回附属図書館運営委員会
 13日 平成14年度第1回図書館事務連絡会
 14日 第4回図書館電算システム仕様策定委員会
 20日 医学分館運営委員会
 30日 第1回独法化のための図書館WG
6月
 4日 独法化のための図書館対策WG
 第2回医学分館運営委員会
 6日 独法化のための図書館対策WG
 第2回図書館事務連絡会
 7日 独法化のための図書館対策WG
 10日 3館体制打合会
 17日 第5回外国雑誌等検討専門委員会
 20日 ISI社 WOK (Web of Knowledge) 利用説明会
 (東広島地区、霞地区)
 21日 業務用電子計算機システムの入札公告

- | | |
|---|---|
| 24日 第6回外国雑誌等検討専門委員会 | 25日 附属図書館利用者アンケート終了日 |
| 7月 | 28日 図書館利用者アンケート回収日 |
| 10日 第215回図書館運営委員会 | 11月 |
| 17日 第3回医学分館運営委員会 | 12日 第6回図書館事務連絡会 |
| 18日 第3回図書館事務連絡会 | 20日 広島大学図書館百周年記念式典、講演会、百周年記念展示会(12月20日まで) |
| 22日 IDS—CSA社、EBSCO社、Pro Quest社データベースの利用者説明会 | 25日 第7回外国雑誌等検討専門委員会 |
| 8月 | 12月 |
| 26日 広島大学後援会研究助成金による海外研修(ソウル大学校・慶北大学校)31日まで | 3日 第217回図書館運営委員会 |
| 27日 SciFinder トライアル及び利用説明会(東広島地区・霞地区) | 10日 第5回自己点検評価WG |
| 9月 | 20日 第7回図書館事務連絡会
附属図書館広報委員会
収書事務委員会 |
| 3日 第4回図書館事務連絡会
独法化のための図書館対策WG | 1月 |
| 24日 第216回図書館運営委員会 | 14日 外部評価WG(中央図書館会議室) |
| 27日 広島大学附属図書館外部評価実施WG構築 | 27日 第8回図書館事務連絡会
会計検査員会計実施検査(31日まで) |
| 10月 | 31日 自己点検・評価委員会 |
| 1日 第5回図書館事務連絡会 | 2月 |
| 9日 外部評価のための附属図書館利用者アンケート実施 | 7日 外国人留学生のためのOPAC講習会 |
| 22日 第6回外国雑誌等検討専門委員会 | 21日 第9回図書館事務連絡会 |
| 24日 独法化のための図書館対策WG(第2回) | 26日 外部評価委員による図書館外部評価(27日まで) |

2003年3月 附属図書館蔵書目録検索システム(OPAC)が新しくなりました。

当検索システムは多言語を表現できるように Unicode (UTF-8) での文字列表示になっています。
URL は旧システムと同じです。 <http://opac.lib.hiroshima-u.ac.jp/index-sjis.htm>



広島大学附属図書館「リエゾン」 Vol.28 2003年3月31日 発行
 発行 広島大学附属図書館 〒739-8512 東広島市鏡山1丁目2-2 電話 (0824)24-6200
 編集 広島大学附属図書館広報委員会

広島大学図書館百年の歩み

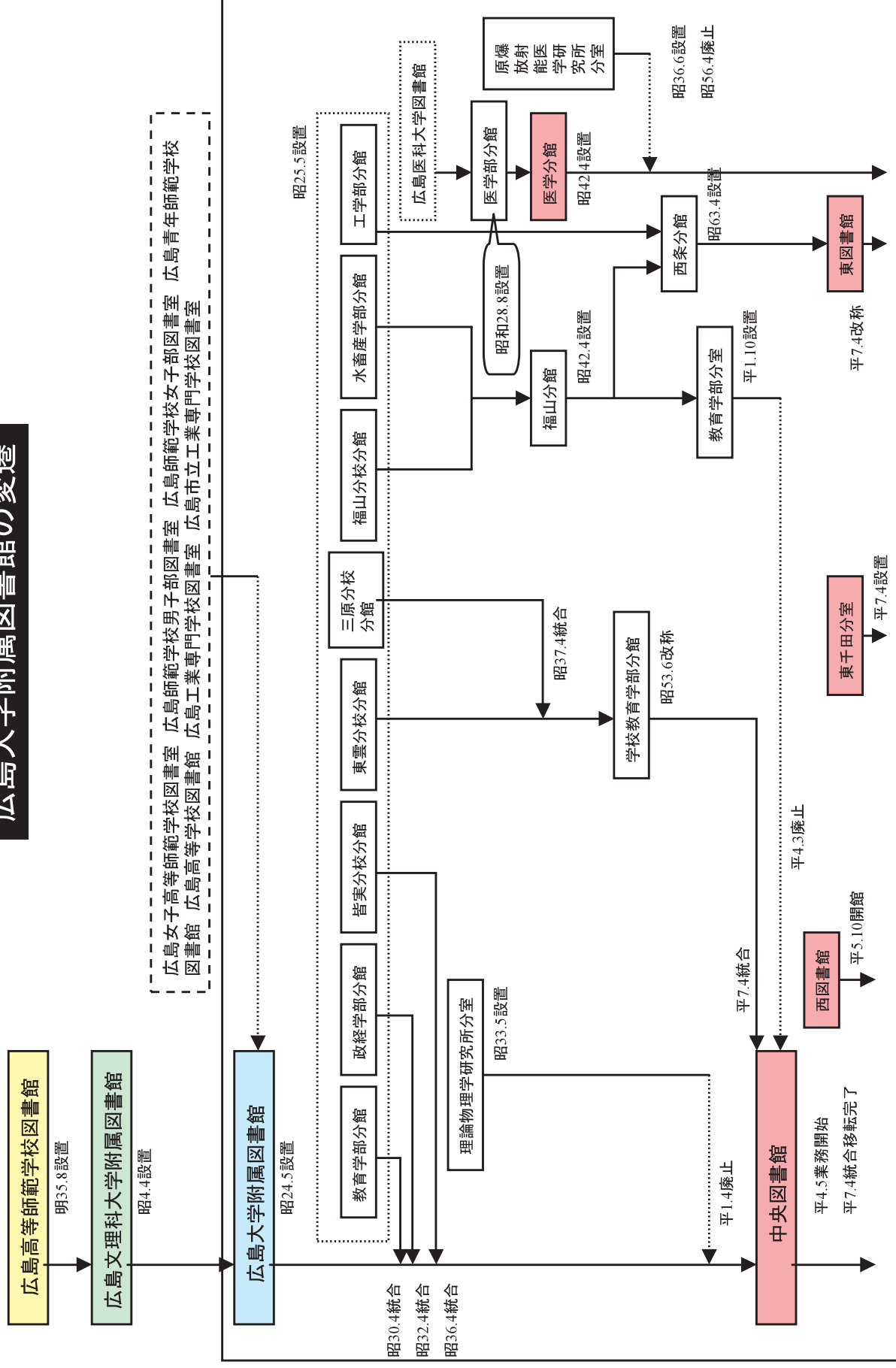
年 表

年次	広島大学図書館沿革（抄）	広島大学沿革（抄）	日本の出来事
明治36（一九〇二） 大正3（一九一四） 大正12（一九二三） 昭和4（一九二九） 昭和16（一九四一） 昭和19（一九四四） 昭和20（一九四五） 昭和21（一九四六） 昭和22（一九四七） 昭和23（一九四八） 昭和24（一九四九）	広島高等師範学校図書館の開設 広島文理科大学附属図書館と改称 閲覧業務を停止し、図書の疎開開始 原子爆弾により建物と蔵書の大半を失う（焼残り図書9万冊） 閲覧再開。教育課程文庫の開設。旧海軍兵学校より図書寄贈 広島大学附属図書館と改称	広島高等師範学校を設置 広島文理科大学を設置。広島高等師範学校は広島文理科大学に附置 広島県立医科大学が開学 広島大学は、広島文理科大学、広島高等学校、広島工業専門学校、広島高等師範学校、広島女子高等師範学校、広島師範学校、広島青年師範学校を包括し、広島市立工業専門学校を併合して設置される。その学部は文学部、教育学部、政経学部、理学部、工学部、水産産学部と定められる。『広島大学学報』創刊 元文部大臣森戸辰男が初代広島大学長および広島文理科大学長に補される 広島大学開学式 広島高等師範学校を廃止 大学院を設置。医学部を設置 広島大学学章を制定。広島医科大学の廃止 原爆放射能医学研究所を設置 広島文理科大学を廃止 教授皇至道が第2代広島大学長に任ぜられる 歯学部を設置。電子計算機室を設置 教授川村智治郎が第3代広島大学長に任ぜられる	ドイツに宣戦布告。第一次世界大戦に参戦 関東大震災 太平洋戦争勃発 広島、長崎に原爆投下。日本、無条件降伏 日本国憲法公布 教育基本法公布 湯川秀樹、ノーベル物理学賞受賞 対日講和条約・日米安全保障条約調印 テレビ放送開始 広島で第1回原水爆禁止世界大会開催 日ソ国交回復。日本、国連に加盟 南極観測隊、昭和基地建設開始 皇太子明仁と結婚
昭和26（一九五〇） 昭和27（一九五二） 昭和28（一九五三） 昭和30（一九五五） 昭和31（一九五六） 昭和32（一九五七） 昭和33（一九五八） 昭和34（一九五九） 昭和36（一九六一） 昭和37（一九六二） 昭和38（一九六三） 昭和39（一九六四） 昭和40（一九六五） 昭和41（一九六六） 昭和42（一九六七） 昭和43（一九六八） 昭和44（一九六九） 昭和45（一九七〇） 昭和47（一九七二）	本館のほか、教育学部、同東雲分校、同三原分校、同福山分校、政経学部、工学部、水産産学部及び皆実分校（教養部）の8分館を設置 アメリカ文化センターより図書寄贈。平和文庫の開設 医学部分館を設置 教育学部分館を本館に統合 政経学部分館を本館に統合 理論物理学研究所分室を設置 皆実分校（教養部）分館を本館に統合 原爆放射能医学研究所分室を設置 三原分校分館を東雲分校分館に統合 国際連合寄託図書館の指定を受ける（昭和41） 福山分校分館と水産産学部分館を統合し、福山分館を設置 医学部分館を廃止し、医学分館を設置 本館、紛争により学生に3日間占拠 経済協力開発機構（OECD）寄託図書館の指定を受ける 蔵書冊数一〇〇万冊突破 館報『図書館だより』創刊 全国に先駆けて、電算機による業務機械化を開始	東千田地区のほとんどの建物が封鎖され、霞地区においても医学部の建物が封鎖される。『学内通信』を創刊 教授飯島宗一が第4代広島大学長に任ぜられる 3年ぶり全学統一の入学式および大学院入学式	学園紛争発生。川端康成、ノーベル文学賞受賞 大阪万国博覧会開催 札幌冬季オリンピック開催 沖縄返還。日中国交回復

昭和48（一九七三） 昭和49（一九七四）	OECDの寄託制が廃止され、OECD協力資料館となる	賀茂郡西条町御園宇地区への統合移転を正式に決定 総合科学部を設置 第1回広島大学原爆死没者追悼式	石油ショック起こる *東広島市発足
昭和50（一九七五） 昭和51（一九七六） 昭和52（一九七七）	「目録業務の改善」にて第11回国立大学図書館協議会賞を受賞 図書館専用機で雑誌管理システムを自主開発 学術文献情報検索（HUNDRED）サービス・テスト開始	『広島大学二十五周年史 包括校史』『同 部局史』を刊行 政経学部を分離改組し、法学部、経済学部を設置 教授竹山晴夫が第5代広島大学長に任ぜられる 学校教育学部を設置 『広島大学二十五周年史 通史』を刊行 水畜産学部を改組し、生物生産学部を設置	広島東洋カープ初優勝 ロッキード事件発覚 王貞治、ホームランで世界新記録
昭和53（一九七八） 昭和54（一九七九） 昭和55（一九八〇） 昭和56（一九八一） 昭和57（一九八二） 昭和58（一九八三） 昭和59（一九八四） 昭和60（一九八五） 昭和61（一九八六） 昭和62（一九八七）	東雲分校分館を学校教育学部分館に改称 「雑誌業務オンライン処理システム（POPS）の開発」にて第14回国立大学図書館協議会賞を受賞 延べ入館者数一〇〇万人突破（昭和24より推計） 原爆放射能医学研究所分室を廃止 工学部分館が新キャンパス（東広島市）へ移転 図書の新検索サービス開始 蔵書冊数二〇万冊突破 パソコンによる貸出システムの運用開始 雑誌の所在検索サービス開始 学術情報センター（現国立情報学研究所）と接続し目録登録開始 広島市立図書館との相互協力サービス開始 工学部分館を廃止し、西条分館を設置	教授沖原豊が第7代広島大学長に任ぜられる 生物生産学部が東広島市に移転を完了 『学内通信』を『広大フォーラム』に改称 教授田中隆莊が第8代広島大学長に任ぜられる 教育学部および教育学部福山分校が東広島市に移転を完了 東千田キャンパスに放送大学開設 附属幼稚園が東広島市に移転を完了 理学部が一部の附属施設を除き東広島市に移転を完了	新東京国際空港（成田）開港 初の共通一次学力試験実施 モスクワオリンピックに不参加 東京ディズニーランド開園 NHK衛星放送開始 つくば科学万博開会 国鉄を分割・民営化 瀬戸大橋開通。リクルート疑惑発覚 *山陽新幹線東広島駅開業 昭和天皇没、平成改元 消費税3%実施
昭和63（一九八八） 昭和64・平成元 （一九八九）	理論物理学研究所分室を廃止 福山分館を廃止し、教育学部分室を設置	教育学部分室が東広島市に移転を完了 総合科学部が東広島市に移転を完了 教授原田康夫が第9代広島大学長に任ぜられる	初の大学入試センター試験実施 湾岸へ自衛隊派遣。雲仙普賢岳で大火砕流発生 台風19号で厳島神社の建造物倒壊 毛利衛、スペースシャトルで宇宙へ カンボジアPKOに自衛隊派遣 *西条駅大学線（ブルーパール）ほぼ全面開通 皇太子徳仁に結婚 冷夏で大凶作、コメを大量輸入 *新広島空港開港 記録的猛暑、渇水被害 関西国際空港開港 広島アジア競技大会
平成2（一九九〇） 平成3（一九九一） 平成4（一九九二） 平成5（一九九三） 平成6（一九九四） 平成7（一九九五）	図書館専用電子計算機の移動 新キャンパス（東広島市）での中央図書館第1期工事竣工 中央図書館へ本館の一部、教育学部分室、理学部から図書資料の移転。教育学部分室を廃止 中央図書館での業務開始 広島県立図書館との相互協力サービス開始 西図書館へ本館の一部、総合科学部から図書資料の移転 西図書館での業務開始 中央図書館へ本館の一部、文学部から図書資料の移転 中央図書館第2期工事竣工 IDOAPC（蔵書目録検索システム）UNIX版の提供開始 中央図書館へ本館、法学部、経済学部、学校教育学部分館、学校教育学部分館を中央図書館に統合	文学部が東広島市に移転を完了 大学院国際協力研究科を設置 情報ネットワークシステム（HINET）運用開始。全部局のコンピュータを結び、インターネットに接続 学校教育学部、法学部、経済学部、附属図書館、大学教育研究センター、機器分析センターが東広島市に移転を完了 法学部・経済学部（第一部・第二部）を改組し、主として夜間に授業を行うコースを東千田キャンパスに設置	阪神・淡路大震災 地下鉄サリン事件 野茂英雄、大リーグ新人王 Windows95発売

年次	広島大学図書館沿革（抄）	広島大学図書館沿革（抄）	日本の出来事
平成8（一九九六）	西条分館を東図書館に改称 東千田分室を設置 中央図書館竣工・移転記念式典・祝賀会 新OPAC（蔵書目録検索システム）の提供開始 統合移転完了行事にて「図書館の公開」実施 館報『図書館だより』を『リエゾン』に改題 電子メールによる新着図書情報の提供開始 CD・ROMサーバによる情報検索サービスの開始 附属図書館ホームページの公開 電子ジャーナルの利用サービス開始 中央図書館日曜開館の開始 学外者利用手続きを大幅に簡素化 外国語雑誌目次データベースのサービス開始 東広島市立中央図書館との相互協力サービス開始 「広島大学附属図書館の電子情報化構想」を策定 東図書館、西図書館のサービス部門を特化し、他の機能を中央図書館へ集中化	「広島大学の理念5原則」を決定 統合移転完了記念式典を行い、元西独首相ヘルムート・シュミットが講演を行う 学生部が東広島市に移転を完了	HIV訴訟和解成立 デジタル多チャンネル放送開始 原爆ドーム・厳島神社、世界遺産に登録される ペルーで日本大使公邸人質事件 消費税5%に引き上げ
平成9（一九九七）	中央図書館に情報検索コーナー（マルチメディア）を設置 中央図書館に留学生用資料コーナーを設置 延べ入館者数二〇〇万人突破（昭和24より推計） 蔵書入力データー一〇〇万件突破 西図書館にオープンスペースラボを開設 西図書館に情報教育端末コーナーを開設 森戸文庫画像データーベース、広島大学紀要目次データーベースをホームページに公開 広島大学創立50周年記念事業にて「貴重資料展示」を開催 東千田分室の移転開館 広島大学学位論文一覧、斯波文庫漢籍目録、森戸文庫蔵書目録をホームページに公開 延べ貸出冊数五〇〇万冊突破（昭和24より推計） 蔵書冊数三〇〇万冊突破 芸予地震による附属図書館罹災 電子化推進室の設置 教科書コレクション画像データーベースをホームページに公開 「斯波文庫漢籍目録」第36回国立大学図書館協議会賞を受賞 「電子図書館化の推進に向けてー時間情報提供体制の確立ー」を発行 引用文献データーベース Web of Science サービス開始 大韓民国・慶北大学校図書館と「交流協定」締結 広島大学図書館一〇〇周年	事務局、附属学校部、広島大学調査室が東広島市に移転を完了 広島大学公式ホームページの公開 大学院先端物質科学研究科を設置	郵便番号7ヶタへ変更 長野冬季オリンピック開催 サッカーW杯フランス大会に初出場
平成10（一九九八）			
平成11（一九九九）		広島大学創立50周年記念式典・祝賀会 『広島大学の50年』を刊行	初の脳死臓器移植 瀬戸内しまなみ海道開通 中国地方に集中豪雨 東海村で臨界事故
平成12（二〇〇〇）		教育学部・学校教育学部を改組・再編し、新たに教育学部を設置 高齢者対象のフェニックス入試制度開始	介護保険制度開始 シドニーオリンピック女子マラソンで金メダル
平成13（二〇〇一）		大学情報サービス室を開設 広大アンテナショップ「わっしょいラボ」を東千田キャンパスに開設 学生会館が東広島キャンパスに完成 教授牟田泰三が第10代広島大学長に任せられる ムタ・メルマガジン創刊	芸予地震 日本初の狂牛病確認 アメリカで同時多発テロ 敬宮愛子さまご誕生
平成14（二〇〇二）	赤川図書館名 青川システム関係 緑川統計	参考資料 『広島大学の50年』『広島大学二十五周年』 広島大学ホームページ 『広島大学附属図書館要覧平成13・14』 附属図書館ホームページ 『日本の世紀館』（小学館） 『日本史年表』（東京堂出版）	サッカーW杯日韓共同開催 初の日朝首脳会談 ノーベル賞ダブル受賞

広島大学附属図書館の変遷



参考文献: 広島大学附属図書館要覧 平成13(2001)/14(2002) p.1-2

広島大学二十五史編集委員会編 広島大学二十五史 部局史(1977) p. 1027-1054
同上 通史(1979) p. 200-201